底に触れる

国際芸術祭「あいち」地域展開事業 現代美術 in 瀬戸

Touch the Bottoms Contemporary Art in Seto

目次

ごあいさつ 03
謝辞 04

展覧会

会場情報 06
藤田クレア 09
植村宏木 13
ユダ・クスマ・プテラ 19
波多腰彩花 23
後藤あこ 27
井村一登 31
津野青嵐 35
木曽浩太 39
田口薫 43
光岡幸一 47

関連プログラム

アーティストトーク／アーティストトーク in 瀬戸市立図書館 52
アーティストワークショップ 53
学校派遣ワークショップ 55
シルクスクリーン体験 56
キュレーターと歩く 57
キュレータートーク in 愛知県図書館 58
交流センター 59
ボランティア活動記録 60
ボランティアと深める 61
瀬戸 まちなか本の市 62
坂道まぼろし夜市 64
サウンドパフォーマンス 66
まちなか連携 67
開催風景 68

テキスト・記録

エッセイ
「底に触れる 現代美術 in 瀬戸」を振り返る／入澤聖明 73
レビュー
表現の底を抜き関係性を作ること――「底に触れる 現代美術 in 瀬戸」を見て／天野一夫 76
作品リスト 79
広報印刷物 82
記録 83

国際芸術祭「あいち」地域展開事業

現代美術 in 瀬戸

Contemporary Art in Seto

底に触れる

Touch the Bottoms

ごあいさつ

国際芸術祭「あいち」地域展開事業は、次代を担う若手芸術家の発掘・育成を行うとともに、子どもたちを始め、多くの皆様に文化芸術に触れていただき、文化芸術のすそ野を広げていくことを目的に、今年度は、瀬戸市の尾張瀬戸駅周辺の文化施設やまちなかを会場に「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」を開催しました。

本展覧会では、国内外で活躍する10組のアーティストが、わたしたちが普段目をむけていないものごとや、ものごとの奥底に潜んでいるものを、うつわや壺の「底」になぞらえて制作した作品をご紹介しました。

また、会期中にはアーティストによるトークやワークショップに加え、本の市、夜市、シルクスクリーン体験、サウンドパフォーマンスなど、様々な関連プログラムを実施したほか、会場周辺では地域の施設や団体による様々なイベントも開催され、地域全体の盛り上がりにもつながったと考えております。

瀬戸市は、本年9月13日から開催される国際芸術祭「あいち２０２５」においても、会場の一つとなります。今回の地域展開事業の成果を活かし、来場される皆様に瀬戸市の魅力を知っていただくとともに、瀬戸市民の皆様にも地域の魅力を再発見していただける機会にしてまいりたいと思います。

最後になりますが、参加アーティストの皆様を始め、本展の開催にあたりご支援、ご協力を賜りましたすべての方々に対し、心より感謝申し上げます。

２０２５年３月

国際芸術祭「あいち」地域展開事業実行委員会委員長　朝日真

謝辞

国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」の開催にあたり、ご支援、ご協力を賜りました方々に、心より御礼申し上げます。（敬称略）

協賛

株式会社 MARUWA
名古屋鉄道株式会社
朝日インテック株式会社
河村電器産業株式会社
瀬戸信用金庫
株式会社ニッショー
富士特殊紙業株式会社
愛知環状鉄道株式会社
株式会社愛知銀行
愛知高速交通株式会社
グリーンシティケーブルテレビ株式会社
瀬戸ロータリークラブ
瀬戸北ロータリークラブ
名古屋競馬株式会社
ネッツトヨタ中部株式会社

会場協力

旧小川陶器店
古民家レンタルスペース梅村商店
瀬戸信用金庫アートギャラリー
ポップアップショップ
松千代館

協力

藤田クレア
株式会社セラミック・ジャパン（中沢郁子）
KM名古屋ドール株式会社（加藤範主）
眞窯（加藤真雪）
ダイワセラミックス株式会社（大竹洋平）

植村宏木
愛知県美術館／瀬戸市美術館／瀬戸染付工芸館
ノベルティ・こども創造館／杉山仁彦／茶園正和
戸田隆也／森正響一

ユダ・クスマ・プテラ
酒井智也／作助窯（加藤圭史）／喫茶 NISSIN
アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会
Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]
タネリスタジオ

後藤あこ
上海乐天陶社

井村一登
愛知県県有林事務所／海馬ガラス工房／硝子企画舎
株式会社 Makership ／ SUWA ガラスの里
市川大翔／カワニシユウキ／酒井佑典／ハヤシカイト
宮川悠之介／米村竜光

津野青嵐
佐瀬和也（KOROMOS）

木曽浩太
愛知県陶磁美術館 陶芸館
足立涼／田中藍衣／矢島与萌

光岡幸一
愛知県陶磁美術館 陶芸館

展覧会

坂道まぼろし夜市・アーティストトークin 瀬戸市立図書館会場
瀬戸市立図書館
東松山
瀬戸市駅
新瀬戸駅
至：尾張瀬戸駅
ノベルティ・こども創造館
B 無風庵
C ポップアップショップ
国道248号
瀬戸川
宮前公園
銀座通り商店街
宮脇橋
招き猫ミュージアム
神明橋
宮前橋
A 古民家レンタルスペース
梅村商店
D 松千代館
せと末広町商店街
記念橋
せとまちツクリテセンター
中央通商店街
パルティせと
[有料]
市営宮川駐車場
瀬戸蔵
（瀬戸蔵ミュージアム）
尾張瀬戸駅
窯神橋
E 瀬戸市新世紀工芸館
瀬戸観光案内所
G 旧小川陶器店
西本町
東本町
瀬戸橋
F 瀬戸信用金庫
アートギャラリー
文化交流館
瀬戸市文化センター
瀬戸市美術館
国道155号
N

会場情報

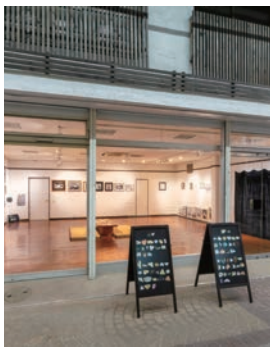
A 古民家レンタルスペース梅村商店

1972年に瀬戸で創業し、茶道具を専門に取り扱ってきた卸問屋、梅村商店が2023年から運営するレンタルスペース。築100年近くの古民家を3代目がリノベーションし、ライブやマーケットなどのイベントを開催している。

B 無風庵

瀬戸の陶芸や小原の和紙工芸など、愛知県内の工芸の指導において大きな足跡を残した芸術家・藤井達吉（1881–1964）ゆかりの草庵。もとは藤井が旧小原村で工房として使用していたものを、1952年に「茶室無風庵」として移築。2001年には全面改修された。

C ポップアップショップ



現在の銀座通り商店街の中に1916年に建てられた雑貨店を前身として家具店、電気店、その後空き家の期間を経て、2012年から2022年までは青果店として用いられ、2023年からレンタルスペース「ポップアップショップ」として活用されている。

D 松千代館

せと末広町商店街にあるリノベーションスペース。もともとは1915年に建てられた旅館で、陶磁器の運搬や卸売に関わる人々が利用したという。2021年に松千代館再生の会が修繕し、愛知工業大学益尾研究室の「学生シェアハウス」と「レンタルスペース」として活用されている。

E 瀬戸市新世紀工芸館

これまでの瀬戸のまちの特性を活かしたうえで、新たな世紀の産業・芸術・文化の発展を図ることを目的として開館。展示棟、交流棟、工房棟からなり、研修生の受け入れ、各種企画展、イベントなどに活用されている。

F 瀬戸信用金庫アートギャラリー

2019年に瀬戸信用金庫発祥店舗のひとつである旧本町支店に開館。瀬戸信用金庫とかかわりの深い画家・北川民次の作品や、地域にゆかりのある陶芸作品を中心に、年間を通じてさまざまな展示を行っている。

G 旧小川陶器店

老舗の国内向け陶磁器卸売・小売店。昭和期から店舗を構えた当地は、江戸時代にあった町の中心地で、その後も旧市役所などの公共施設が集中したエリア。2014年の第83回せともの祭を最後に閉店した。

藤田クレア
FUJITA Claire
1991年生まれ

会場
古民家レンタルスペース梅村商店

貝殻や石や鳥の羽といった自然物と、モーターや金属部品などの人工的な素材を組み合わせた藤田の作品は、まるで生命を吹き込まれたかのように、一定のリズムを刻んだり音を発したりします。藤田は、さまざまな要素や機能から成るものを一つ一つ分解して再構成することで、それぞれは見慣れているはずのパーツから思いがけない形態を作り出し、華麗に作品へと昇華させてきました。

今回、藤田は瀬戸の街を散策し、マンホールや石垣、公園のタイルなど、街の至るところに見られる特徴的な模様を粘土を使って採集し、その凹凸を音に変換することで、瀬戸の街を聴覚的に再現しようと試みました。視覚的にも美しいこれらの模様は、藤田自らが設計したレコードプレーヤーやオルゴール機を通じて、音となって空間に響き渡ります。また、陶片に土が降り積もる作品では、焼かれることで陶片として固定された過去の時間と、その上に積もりゆく生の陶土がはらむ可変的な未来という、2つの異なる時間軸を融合させることを試みました。

ゆるやかに回転し続ける貝や、模様が音に変換されていく様子、モコモコと降り積もった土を、わたしたちはついじっと見つめていたくなります。それは、有機的な形態や均質ではないリズム、ひいては偶然が導き出すいびつさが、鑑賞者の感覚に訴えかけているからかもしれません。

展示風景

藤田クレア
FUJITA Claire

上：《Invisible soundscape -version1: (1+√5)/2+x-》2020年
下：《聴こえる風景 -Tones of the City-》2024年（部分）
次頁：展示風景

藤田クレア
FUJITA Claire

上：《変化の残響 -Echoes of Transition-》2024年
下：《街の型取り》2024年

植村宏木

UEMURA Hiroki

1990年生まれ、北海道出身

会場
無風庵

植村はこれまでガラスを表現の主体としながら、時間や記憶の積み重なりによって生まれてくる、「場所」や「モノ」がもつ気配をすくい取るような作品を手がけてきました。

展示の舞台となる無風庵は、藤井達吉を慕う瀬戸の陶芸家たちによって戦後に移築されました。移築された場所は殉国慰霊塔や忠魂碑も立ち並ぶ空間で、瀬戸の街並みを一望できる小高い丘となっています。

植村はこの場所の由来と昭和の時代感に焦点を当てました。広場には瀬戸の産業の基盤となってきた陶やガラスを塊として表現したものや、産業的な発展に伴い白濁していった瀬戸川の石など、往時の繁栄や人々の営み、あるいは時間経過を彷彿とさせる品々が、製品の輸送に使用されていたりんご箱に収められ、インスタレーションとして展開されました。

そして無風庵の内部では、実際に藤井が使用した道具、あるいは手がけた作品もあわせて展示を組み上げることで、さまざまな角度から過去あるいは現在の、その場に向けられた視線や意識を探っています。さらに珪砂がガラスとなって析出したかのような山を出現させることで、瀬戸の足元に広がる珪砂の存在や、ガラス産業にも言及しています。

植村は以上のような多視点的な試みを通して、瀬戸が無数の人々の営みによって膨大な時間と歴史を積み重ねてきた地であるからこそ、複層的な時間軸の多様な事象が存在すること、そしてそれらを紐解いていくことの魅力をわたしたちに気づかせてくれるのです。

《うぶすなのこえ》2024年

植村宏木
UEMURA Hiroki

上：《有無のはかり》2024年
下：《有無のはかり》（部分）2024年

藤井達吉

FUJII Tatsukichi

1881年生まれ、1964年没、愛知県出身

藤井達吉は明治期における殖産興業としての工芸を、自律した芸術表現として確立すべく活動を展開した愛知県ゆかりの芸術家である。その活動は幅広く、工芸・絵画・図案創作（デザイン）・書籍執筆など多岐にわたる。なかでも愛知県内の郷土工芸を振興すべく昭和期以降におこなった後進の育成や指導は、瀬戸の陶芸界や小原村の和紙工芸の発展に欠かすことのできないものとして特筆される。

本展で植村は、昭和期の藤井の眼差しを探るべく、愛知県美術館・瀬戸市美術館所蔵の藤井作品から七宝・陶芸・掛軸・絵具箱を選び出し、自身の作品とあわせて展示を構成した。

紙面の都合上限られた紹介となるが、例えば碧南市の権現崎（ごんげんざき）にかつて存在し、藤井が親しみを込めて接していた傘松を思わせる松の絵付が施された徳利には、植村が実際に権現崎へと足を運び、そこにある碑文を写し取ってきた素焼きの陶芸作品と松の葉を合わせて展示した。また、掛け軸や薊（あざみ）の絵付の石皿には、藤井の絵具箱やその中に収められていた絵皿、包み紙、あるいは拾い集めたであろう貝殻を丁寧に取り合わせていた。

これら美術館の収蔵品に自身の作品を組み合わせたり、あるいは関連するものをインスタレーション的に構成する見せ方は、作家だからこそ可能なアプローチであったと言えよう。

藤井達吉《櫛目薊文大皿》制作年不詳

植村宏木
UEMURA Hiroki

上：［左から］藤井達吉《海》1910年、藤井達吉《上州白根頂上》1919–35年　愛知県美術館蔵
下：《漂泊の旅》2024年、藤井達吉《赤絵松原図花器》1935年頃　瀬戸市美術館蔵

植村宏木
UEMURA Hiroki

藤井達吉《青い岩》制作年不詳

植村宏木
UEMURA Hiroki

藤井達吉《漆描薬袋図》制作年不詳
藤井達吉旧蔵絵具箱

ユダ・クスマ・プテラ
Yudha Kusuma PUTERA

1987年生まれ、マゲラン（インドネシア）出身

会場
ポップアップショップ

大きな布に包まれたお化けのような生き物に、顔がひとつ、ちょこんと出ています。そんな印象的なポートレートは、プテラが継続して制作してきたシリーズで、実際には家族や職場の同僚、ペットなど、親密な関係にある生き物同士が布にくるまって、一つの大きな身体を構成しています。プテラはこれまで、家族やコミュニティにおける人間関係や、人間と動物や自然の関係性について考察し、他者とのコミュニケーションを題材にした作品も数多く制作してきました。瀬戸に滞在したプテラは、この地域における人と人、人と自然、人と街の、変わり続ける関係性に着目した作品を展示しました。

《過去、現在、未来がひとつに》は、必ずしも血縁関係によらないさまざまな形で結ばれた〝家族〟の多様性と一体感に焦点を当てたシリーズです。家族とは、精神的に繋がっているだけではなく、肉体的、社会的、文化的にも結びついたひとつの個体でありながら、同時にそれを構成するのは個々人の身体であるということを視覚的に示しています。2023年に名古屋港のアッセンブリッジ・ナゴヤ「港まちAIR エクスチェンジ 2023」に参加した際に撮影した作品に加えて、今回新たに瀬戸で撮影した3点を展示しました。

《鳥とネット》は、人々の生活と自然の関わり方について考察したコラージュ作品です。「港まちAIR エクスチェンジ 2023」で名古屋港に滞在した際、日本ではよく見られる、マンションのベランダなどに設置された防鳥ネットを見たプテラは、その目的とは逆に、人が自らをネットで覆う一方で鳥たちこそが自由に動き回っているのではないかと新鮮に感じたといいます。人と鳥とネットの関係を見直すことによって、人が持つ自由への欲望とその限界や、他者を受け入れる必要性について考えを巡らせています。

《瀬戸の詩的断片》は、海外の多くの国に比べて、日本の街の景観はイメージではなく文字で埋め尽くされているというプテラの印象を出発点にしています。プテラは、瀬戸に住む人々に瀬戸に対する想いや気持ちを示す一文字を陶片に書いてもらい、それぞれの思いを紡ぎ合わせることで、普段は見過ごしてしまいがちな感情や無意識下の感覚を炙り出しました。

展示風景

ユダ・クスマ・プテラ
Yudha Kusuma PUTERA

《過去、現在、未来がひとつに》2017年、2019年、2023年、2024年
次頁：《瀬戸の詩的断片》2024年

dream
MIA SEGUNDA PATRIA

上：展示風景
下：《鳥とネット》2024年

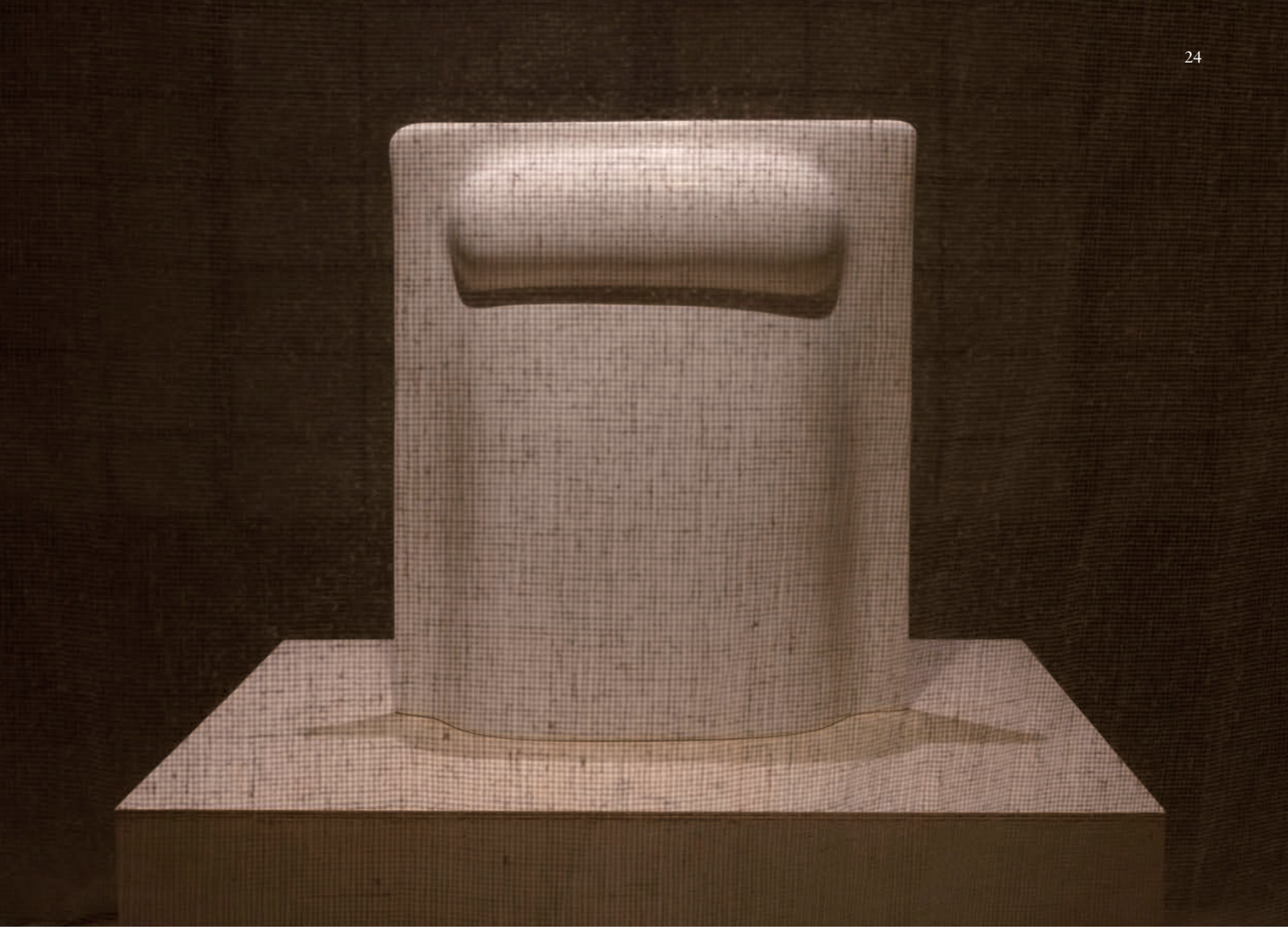
波多腰彩花
HATAKOSHI Ayaka
1995年生まれ、長野県出身

会場
松千代館

波多腰は陶の造形を軸として、《Fragments of Daily》というシリーズに取り組んできました。このシリーズでは、例えばスポンジの上に置かれた石鹸、等間隔に置かれたプランター、向かい合う椅子、海に浮かぶ何隻もの船、ふたつ並んだスイッチなど、普段の生活のなかで自身が見出したモノとモノの関係性や距離感、そこに生まれるリズムなどに着想を得て、それらに形や触感を与えることをテーマとしています。

本展ではさらなる展開として、空間自体も取り込む在り方を模索しています。焼成というプロセスを経る陶の造形は、膜構造として空間を孕んで成立します。なぜなら、窯の中での水蒸気爆発による破損を避けるため、内部は空洞でなければならないからです。それゆえ塊のような形を作りたくても、通常は中身をくり抜くか、あるいは紐状の粘土を3Dプリンターのように輪積みすることで中空構造を作り出す必要があります。波多腰の作品は、自身の過去の記憶や情景などに、確かに存在した心地よい空気感や空間を捉えて内包するものとして、そのやきものならではの造形的特質と密接に関わりを結んだ表現となっています。そしてこれらをさらに薄布の空間内に置くことで、鑑賞者が内と外を行き来しつつ重層的な空間の存在を知覚する展示を成立させています。加えて波多腰の作品は、低火度で焼き上げることで柔らかな質感をともない、時に小さな穴が表面に穿たれています。それは空間を仕切りながらも閉ざしきらない薄布と呼応するかのように、私たちの意識を内と外との関係性へと誘っています。

《Skin of a Calm Day》2024年



《Skin of a Calm Day》（部分）2024年

波多腰彩花
HATAKOSHI Ayaka

《Skin of a Calm Day》（部分）2024年

《Skin of a Calm Day》（部分）2024年

後藤あこ
GOTO Ako

1989年生まれ、愛知県出身

会場
瀬戸市新世紀工芸館

後藤は具象彫刻のインスタレーション作品に演劇的な要素を取り込み、舞台装置のように虚構と現実が表裏一体となって成立する彫刻表現を試みてきました。近年では具象表現によって導かれるストーリー性に着目し、役者とのパフォーマンスや映像作品など、フィクション（あちら）とノンフィクション（こちら）を行き来する表現にも挑んでいます。

本展では、活動拠点を構える上海での生活のなかで、日本と同じ東アジア地域にカテゴライズされる国の人々との関わりから見えてくるものをテーマとしています。後藤によれば、東アジア地域に暮らす人々は外見上の特徴が近しいことも多く、見た目から出身国を類推できないことがしばしばあるといいます。しかし、現地での人との交流を通して見えてきたのは、陶の制作におけるロクロの回転方向が国や地域によって異なっていたり、中国語における「外巻」と「内巻」という言葉の意味がネガポジの関係性を持っていたり、あるいは「愛」という言葉の概念には国ごとに大きな相違があるなど、多様な差異が共存関係を保持していることでした。それらは国家や政治という大きな枠組みの相違では捉えきれず、目を凝らさないと見えてこないものです。本作において後藤はその現状を、上海で出会った東アジア地域の各地にルーツを持つ実在の友人をモチーフにした彫刻をつくり、それが回転台の上でくるくると回る世界として表現しました。独自の解像度で描き出された、限りなく似通ったなかに存在するあちらとこちらは、虚構と現実という同時に存在する異なった世界をテーマとしてきた後藤ならではの視点がうかがえます。

《細い目》展示風景 2024年

後藤あこ
GOTO Ako

《細い目》（部分）2024年

後藤あこ
GOTO Ako

《細い目》（部分）2024年

後藤あゝ
GOTO Ako

《細い目》（部分）2024年

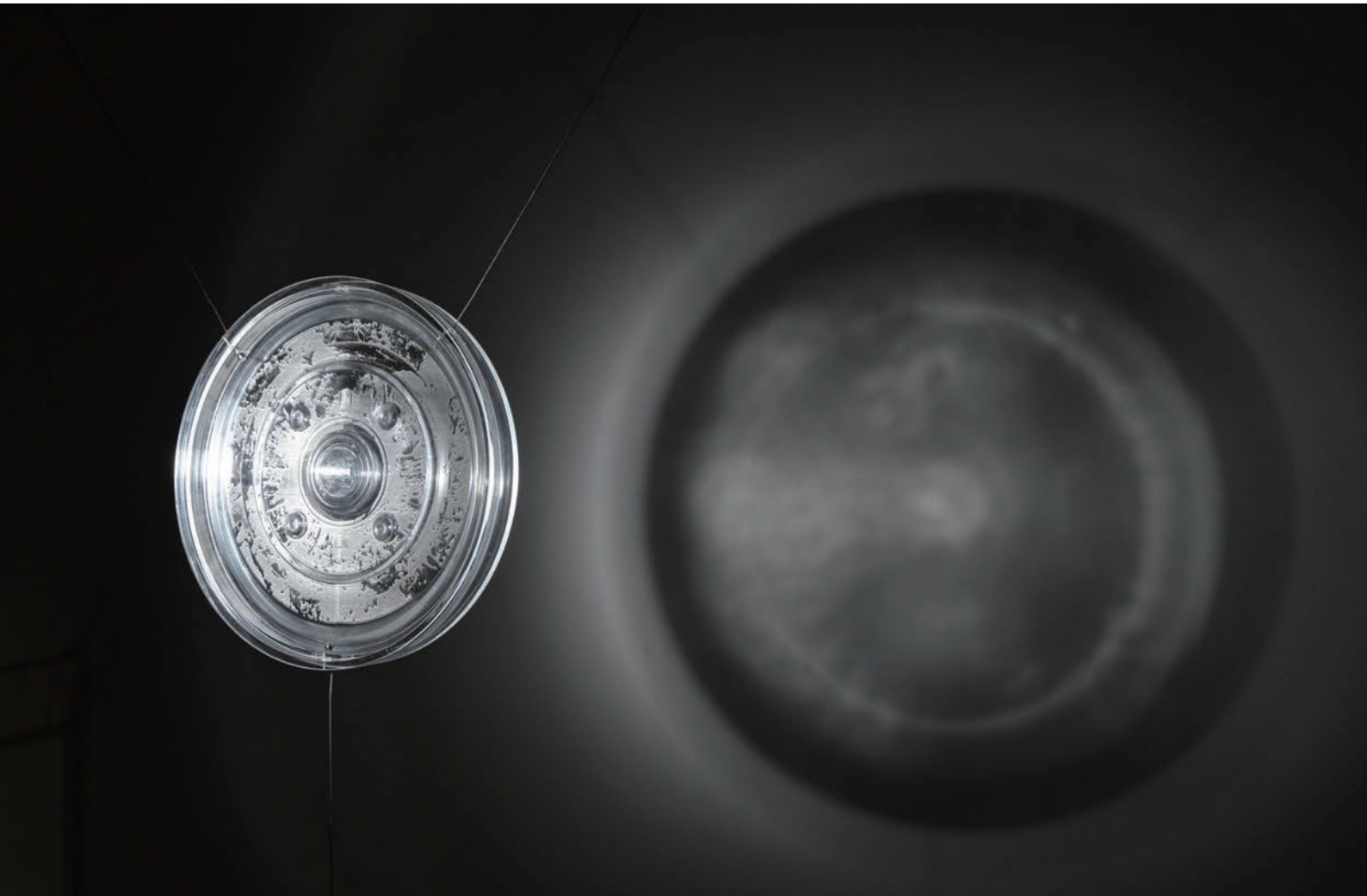
井村一登
IMURA Kazuto
1990年生まれ、京都府出身

会場
瀬戸市新世紀工芸館

井村は鏡をテーマとして、鏡の光学的な構造や、文化的位置づけ、あるいはその歴史など、多角的なリサーチに基づいて制作をしています。

鏡は私たちの生活にとって身近な存在です。しかし、当たり前のモノであるがゆえに、意識に立ち上らない部分が数多く存在します。例えば自らを映し出す、あるいは何かを映し出すといった鏡の存在と密接に関わる行為でさえ、古代から現代に至るまでその意味合いやツールは変化し、人々はその行為に魅了され続けています。

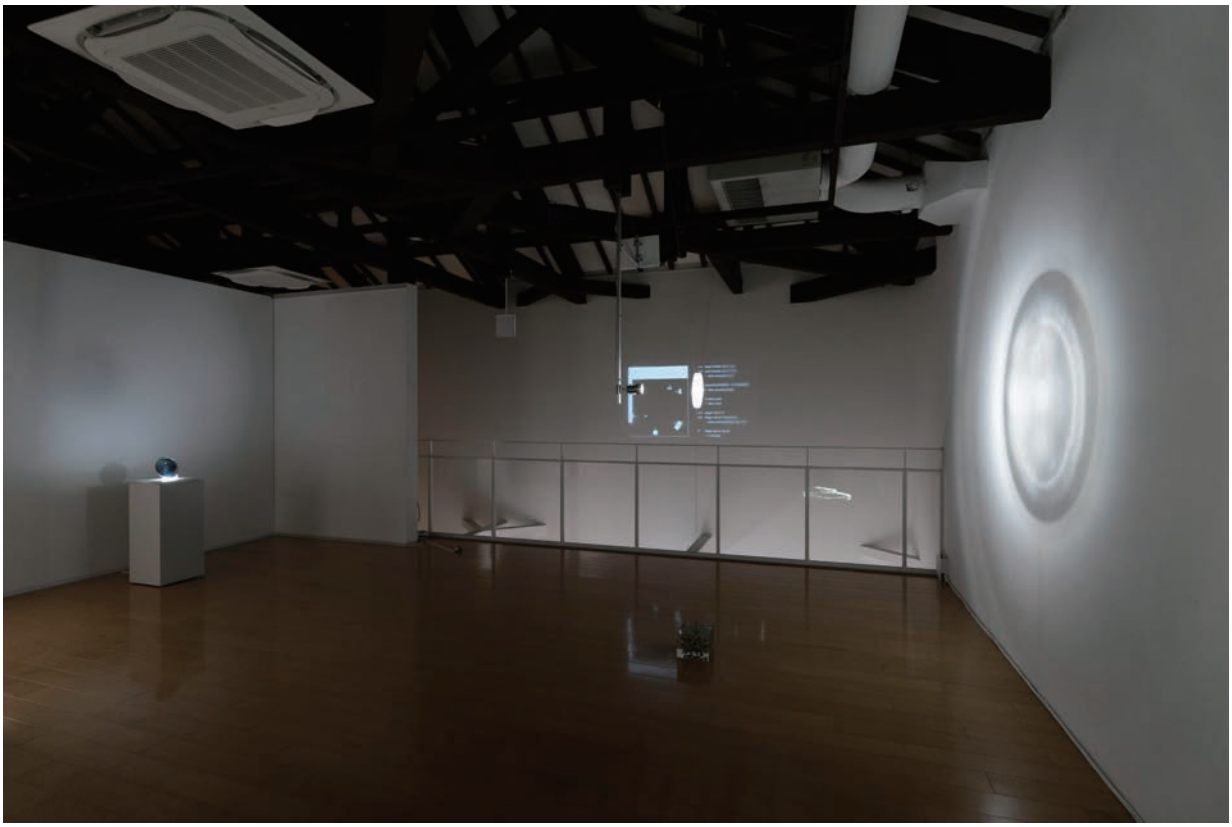
本展で井村は、愛知県における人と鏡の関係性に着目しました。犬山市の東之宮古墳から出土した重要文化財（国指定）の三角縁神獣鏡、新城市に位置する鳳来寺山の鏡岩における銅鏡と信仰、現代の鏡の主な素材となるガラスの原料（珪砂）が採掘される瀬戸市の鉱山、そしてその珪砂産業を担った組合が祀った富士浅間神社など、数々のリサーチを通して、実践的に情報と素材を収集していきました。そして井村はその情報や素材を魔鏡という造形物へと昇華し、リサーチや制作の経緯を図像として浮かび上がらせています。つまり彼は鏡を軸として、その歴史性や信仰、あるいは産業的側面にも言及することで、地場に紐づいた鏡の位置づけを顕在化しようと試みているのです。そして、いつしか人の暮らしの一部を支えるための産業製品となっていった鏡の、表現主体としての可能性も提示しているのです。



《Magic mirror》（部分）2024年

井村一登
IMURA Kazuto

《Magic mirror》（部分）2024年



井村一登
IMURA Kazuto

《Magic mirror》（部分）2024年

井村一登
IMURA Kazuto

上：《mirror in the rough 1888g》2024年
下：《mirror in the rough》展示風景

津野青嵐

TSUNO Seiran

1990年生まれ、長野県出身

会場
瀬戸市新世紀工芸館

人が基本的な生活を営むうえで、衣服は食物や住居とならんで不可欠なものとして挙げられます。さらには身体を外部の環境から守るだけでなく、社会的役割や権威性の象徴、あるいは自らの表現手段として用いられてきました。そして時には言語のように、特定のコミュニティにおける記号としての役割も果たします。

これまで津野は、病院をはじめ、地域における精神科看護師としての経験や、身体的経験を背景として、身体あるいは他者との関係性における衣服の役割に着目したテキスタイル造形を手がけてきました。また、3Dペンを使用した作品群は、次世代のテキスタイル表現として世界的な評価を得ています。

本展にあたって津野は、ベッドの上での臥床生活となって介護を要するため、共に食卓を囲むことが難しい最愛の祖母との日々の経験を基とした制作に取り組むことを決めました。介護を要するということは、これまでとは異なる日常を受け入れ、生活様式を変化させていくことが暗黙の前提となってしまいます。しかし、津野はその変化を受け入れつつも、介護ベッド上の祖母がテーブルクロスと一体となった衣服を着用し、他者を招き入れるという作品をつくることで、食卓を囲むというこれまでの日常を新たなかたちで実現しました。そこには家族や親族たちの温かで穏やかな関係性が可視化されています。さらに本作は、衣服が物理的に人々の間に介在することで、より密なコミュニティを構築し得る可能性も示唆しているのです。

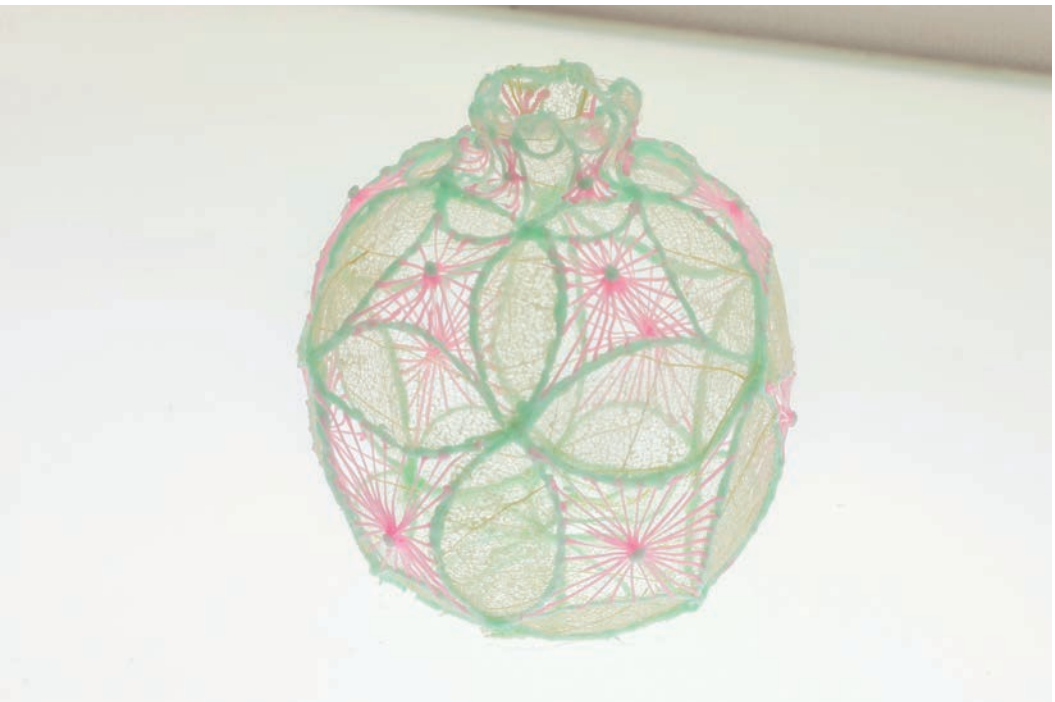
《The Wishing Table》2024年

津野青嵐
TSUNO Seiran

《The Wishing Table》（部分）2024年

津野青嵐
TSUNO Seiran

《The Wishing Table》（部分）2024年



展覧会

津野青嵐
TSUNO Seiran

《Trace the pottery》（部分）2024年

展覧会

木曽浩太
KISO Kota

1985年生まれ、愛知県出身

会場
瀬戸信用金庫アートギャラリー

瀬戸市立図書館を彩る陶壁画《無知と英知》《知識の勝利》は、メキシコで画家や教育者として活動し、帰国後は瀬戸に移り住んで精力的に活動した北川民次による作品として、瀬戸の人々には広く知られています。瀬戸に生まれ育った木曽は、これらの北川の陶壁画に着目して、新たな作品を制作しました。

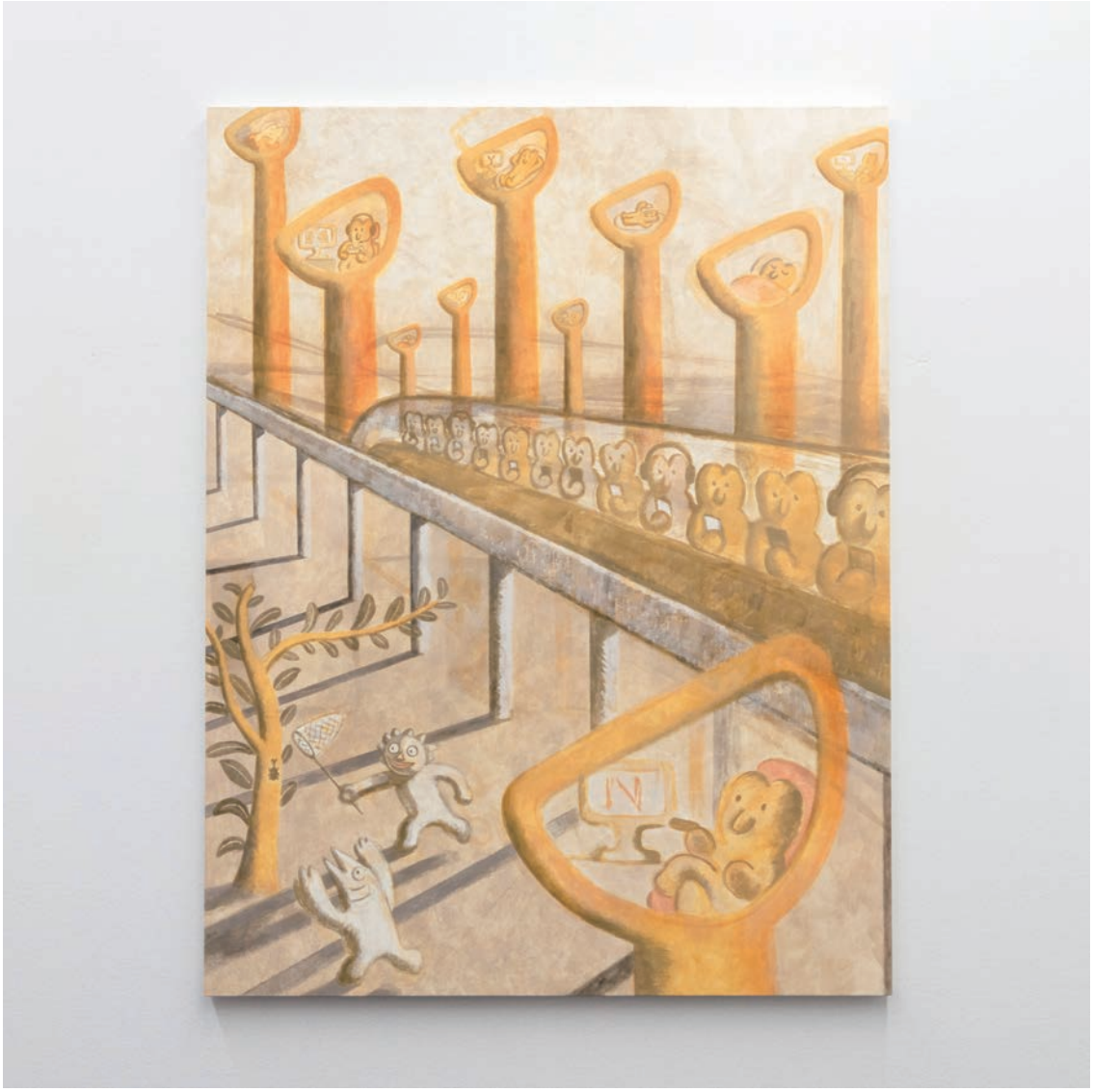
木曽は、これらの陶壁画が単に知識を称揚するものだというストレートな解釈に、疑問を投げかけます。北川には、もしかすると机上で身につけた知識だけに頼ることの危うさに警鐘を鳴らす気持ちもあったのではないか、そのように考えた木曽は、北川の陶壁画に登場する生き物たちの内面に独自の解釈を加え、なかでも「無知」を主人公とした新しい物語を紡ぎ出しました。そこでは人間たちが知識を得て文明を発展させ、ついには自らの体をサイボーグ化して戦争を始める一方で、「無知」は変わらず幸せそうに遊び続けています。

しかし木曽はここで、知識よりも無知が優れていると主張したいわけではありません。木曽はネットで身につけた知識だけを頼りに、自ら「無知」に扮して人生初のキャンプに挑み、それを映像作品に仕立てています。頭では分かっていても、実際にやってみるとどこか不慣れで不恰好だったり、予想外のことが起こるものです。一連の作品からは、自分の身をもって経験的に身につけた知識の重要性が炙り出されています。

瀬戸の土を用いながら、淡い色使いと柔らかな筆致でポップに描き出されたキャラクターたちは、北川の物語と木曽の解釈に基づきながらもどこか捉えどころがなく、多様な見方を促すかのように観る者の視線を画面の中へと引き寄せます。

［右から］《毎日遊んでられる状態》2024年、《愛知者たち》2024年

［右から］《人柱》2024年、《マトリックスマデアトスコシ》2024年



木曽浩太
KISO Kota

上：《多様性の時代》2024年
下：《あいつも来てればなあって》2024年

展覧会

関連プログラム
「木曽浩太サテライト展示 in 瀬戸市立図書館」として
瀬戸市立図書館で展示しました。

上：《むちキャン～ネットで調べまくって準備万端なのでちょっと初キャンプ行ってくる～》2024年
下：《むちキャン番外編～水辺で遊ぶ無知たち～》2024年

田口薫

TAGUCHI Kaoru

1995年生まれ、愛知県出身

会場
瀬戸信用金庫アートギャラリー

びっしりと画面を覆う無数の線が、画面の中にダイナミックな動きやうねりを生んでいます。よく見ると、それは描かれているのではなく、彫られていることがわかります。板を彫ってはそこに彩色を施すという作業を何度も繰り返すことで、表面には複雑な奥行きが生まれ、複数の視点や時間軸に基づくイメージが折り重なるように表されています。そのため、じっと画面を見つめていると次第に複数の図像の輪郭線が浮かび上がってきて、見る角度や距離によって図像や構図の見え方が異なるように感じられ、描き出されたもの同士の位置関係や空間に対する私たちの感覚をかき乱すかのように、観る人の視点を揺るがします。

田口は、自身が生まれ育った瀬戸の記憶の断片を繋ぎ合わせるようにして、私的な瀬戸の風景画を制作しました。現在は瀬戸を離れて暮らす田口にとって、今回の展示は瀬戸で暮らしていた時の自分と街の間にあるつながりや当時の自分の心境を外から見つめ直すきっかけとなるものだったといいます。特に印象に残っている場所を再訪し、その景色を1本1本の線でなぞるかのように彫り込んでいくことによって、当時の心情に思いを馳せ、自身を構成するアイデンティティを明らかにしようと試みました。

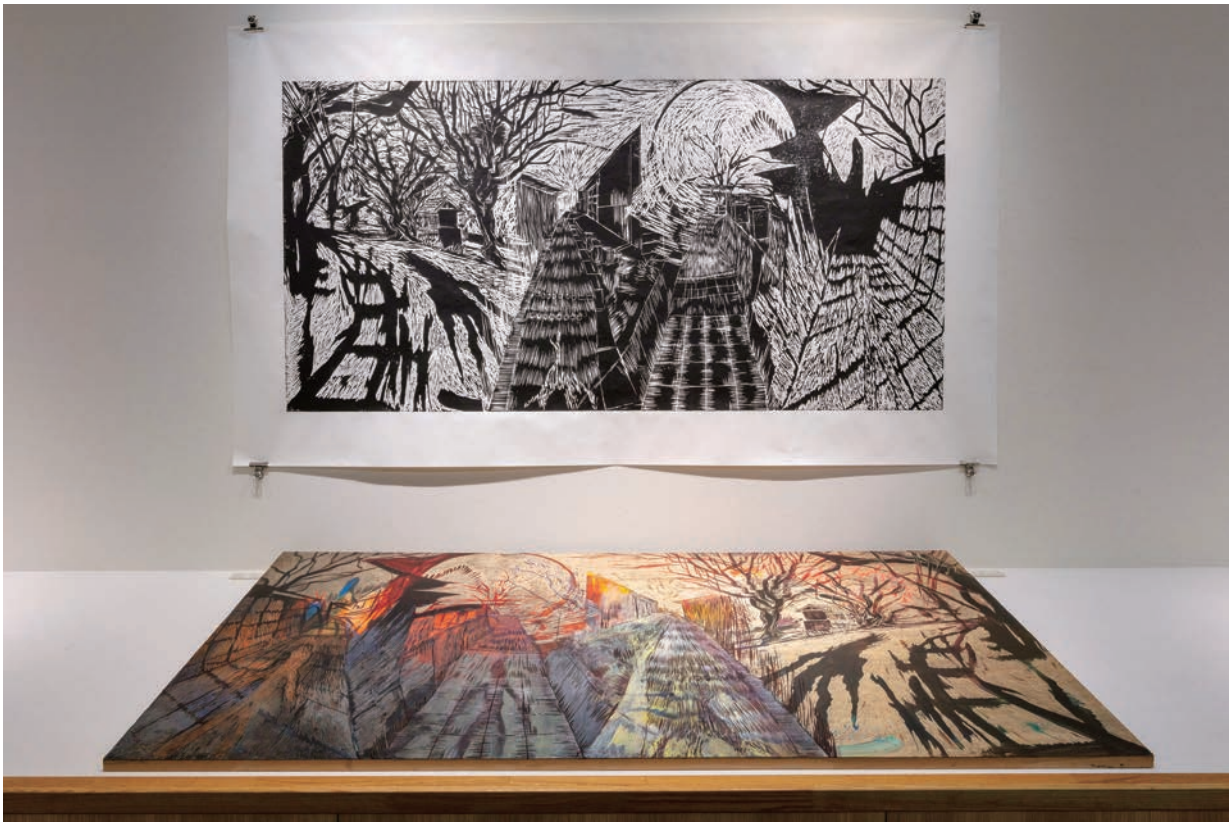
力強くうねるような曲線や細かく勢いのある直線、幾重にも塗り重ねられた深みのあるトーンによっていきいきと描き出された瀬戸の街並みは現在の風景に当時の田口の心情を色濃く反映させたものであり、街の息遣いが聞こえてくるようです。

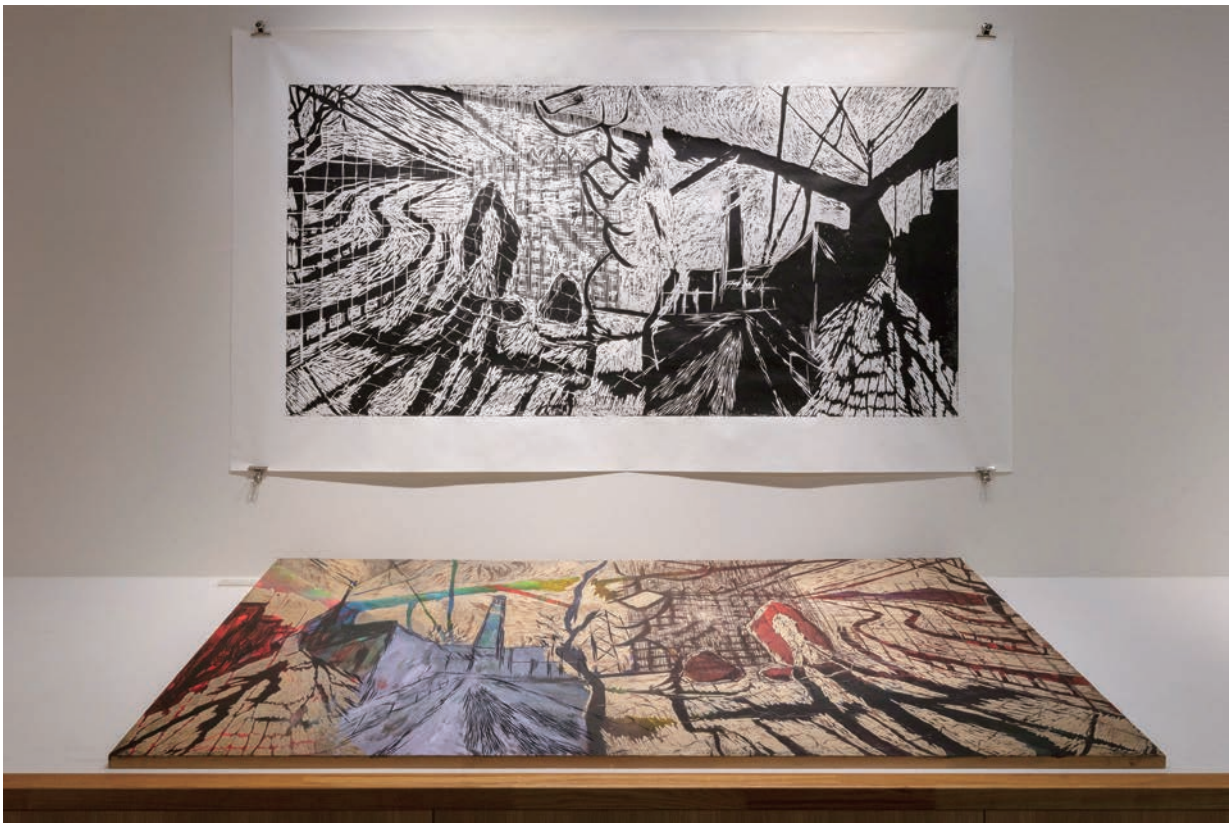
《光の跡、遡行する影》（部分）2024年

田口薫
TAGUCHI Kaoru

上：《光の跡、遡行する影》2024年
下：《光の跡、遡行する影》（部分）2024年

田口薫
TAGUCHI Kaoru





《光の跡、遡行する影》（部分）2024年

田口薫
TAGUCHI Kaoru

《光の跡、遡行する影》（部分）2024年

光岡幸一
MITSUOKA Koichi
1990年生まれ、愛知県出身

会場
旧小川陶器店

ずいぶん前に閉まったはずの老舗の陶器店に、「あとはどうぞご自由に。」の看板が見えます。店先に置かれたコンテナや簡易な棚にはところ狭しと食器が並んでいますが、瀬戸では見慣れた光景です。覗いてみれば、食器の一つ一つにも「ご自由に。」「ごかってに。」「かってにね。」といった、色とりどりの文字が踊っています。

尾張瀬戸駅から瀬戸川を挟んだこのエリアには、江戸時代には陶磁器流通を管理した御蔵会所が置かれ、明治時代以降は陶磁器陳列館や役所などが並んでいました。今ではまちもずいぶん様変わりして、当時の名残は隣の瀬戸蔵に集約されています。2014年に閉業して以来店内で静かに埃をかぶっていた売れ残りの皿や丼、湯呑、鉢などの日用的な商品を譲り受けた光岡は、それらに上絵具で文字やイラストを描き足して窯入れし、新たに生命を吹き込みました。土という天然素材から生み出されるがゆえに、私たちはやきものに対してなんとなく環境に負荷をかけない「エコ」な印象を抱きがちですが、高温で焼かれ変質した陶土は放っておいても自然に還ることはありません。だから廃棄となれば、（リサイクル可能な一部のものを除いて）いずれ細かく砕かれ埋め立てられる運命にあります。

いつまでも店内に置いておくわけにもいかないこうした食器類を、光岡は外へ持ち出し、できるだけ自由に任せて人々の生活のなかへと流通させようとします。来場者はここに並んだ食器を好き好きに持ち帰ることができ、包装紙に印刷されたテキストは、このアイデアが生まれた経緯を包み隠さず語っています。会期後半に全ての食器がなくなると、光岡は新たに「お皿を見られなかった人たちへ。」というテキストを配布し、このアイデアと遠く響き合うようなまちなかのスポットを紹介して来場者にまち歩きを促しました。

《あとはどうぞご自由に。》2024年

光岡幸一
MITSUOKA Koichi

《あとはどうぞ自由に?》（部分）2024年

包装紙に掲載した光岡幸一によるテキスト（抄）

ここ瀬戸で来年、国際芸術祭が開催される。その前年にあたる今年（2024年）、その芸術祭の事務局の企画で展覧会が開催される事になり、そこに出展者として声がかかった。僕に割り当てられた会場は、もう何年も前に閉店してしまった町の陶器店で、店内には売れ残った食器や什器がそのまま残されていて、直感的にその場所を気に入った。閉店した今、売れる見込みもなく、かといってわざわざ捨てられる程でもなく、誰の気にも止められないままなんとなくそこに居続ける皿たち。一度焼かれてしまったら、もう柔らかい粘土には戻れないのだ。この皿たちはこれからどうなっていくのだろう。店内につもりつもった時間が、ここにしかない空間を作り上げていた。それは、意識的に作ろうとしても作る事はできないもので、多分僕はそれを気に入ったのだ。瀬戸は焼き物で栄えた街だが、閉店してしまったこういうお店もたくさんあった。

そんな陶器店を、キュレーターの意向で、来年の国際芸術祭でも企画を行うラーニングチームと共同で使う事になったのだが、その使い方で真っ向から意見が割れてしまった。店の雰囲気をそのまま残したい僕に対して、プログラムのために十分なスペースを確保したいラーニングチームの意向とで、方向性が別れてしまったのだ。長い話し合いは平行線のまま、中々うまくいかなかった。各々が譲れない大事なものを持って向き合えば、こういう事はある。中途半端に譲り合ってお互いが納得できないものになってしまうくらいなら、辞めるのもひとつの道だ。そう思って一度は展覧会の辞退も申し出た。そう思わざるをえない程難しい状況だった。

それから数日。展覧会をどうするのかを部屋でぼ～～～～っと考えていた。その時、あの売れ残った皿たちが何故かふと頭をよぎった。この八方塞がりな現状で、あの皿たちに勝手にシンパシーを感じてしまったのかもしれない。しばらく皿たちを思い浮かべていたその時に、ある思いつきがふってきた。中が使えないのならもういっそ外に出ちゃおうか、皿たちと一緒に。そんでもう中はおまかせして、僕らは外に出ちゃおうか。そうしよ。そういう道もある。あった。そういった経緯があってこの皿たちはここに並び、かなり久しぶりに再び人の目に触れることになったのだ。ここにあるお皿たちは自由に持ち帰ることができる。

あとはどうぞご自由に。

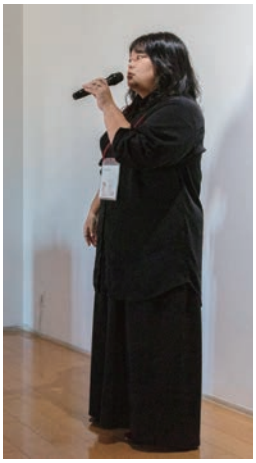
関連プログラム

アーティストトーク

展覧会の参加アーティストが自身の作品などについて解説しました。

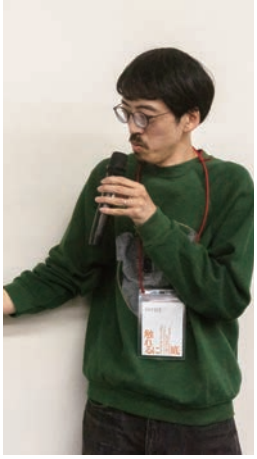
10月12日(土)／参加者：349人

後藤あこ
10時－10時30分
瀬戸市新世紀工芸館展示棟1階



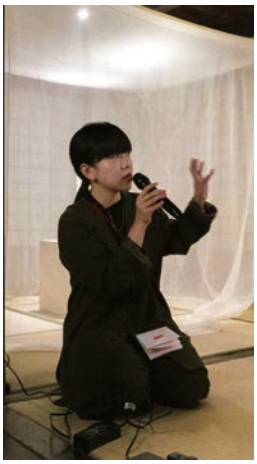
津野青嵐
10時30分－11時
瀬戸市新世紀工芸館展示棟2階

井村一登
11時－11時30分
瀬戸市新世紀工芸館展示棟2階



木曽浩太
11時45分－12時15分
瀬戸信用金庫アートギャラリー

田口薫
12時15分－12時45分
瀬戸信用金庫アートギャラリー



波多腰彩花
13時30分－14時
松千代館

ユダ・クスマ・プテラ
14時15分－14時45分
ポップアップショップ

植村宏木
15時－15時30分
無風庵

藤田クレア
15時45分－16時15分
古民家レンタルスペース梅村商店

光岡幸一
16時30分－17時
旧小川陶器店

アーティストトーク in 瀬戸市立図書館

植村宏木
10月19日(土) 15時－16時
会場：瀬戸市立図書館1階集会室
参加者：20人

アーティストワークショップ①

瀬戸の街の模様を音に変えよう！

藤田クレア

瀬戸のまちなかで採取した模様の中から好きなものを選び、そこに自分で音をつけてオリジナルレコードを作りました。

10月20日（日）13時30分－16時
会場：ノベルティ・こども創造館2階ワークショップルーム
対象：小学4年生以上／参加者：9人

アーティストワークショップ②

彫ってつなげて みんなでつくろう パノラマ版画

田口薫

好きな風景やかたちを彫って、それを一枚の紙に刷って
合作パノラマ版画を作りました。
バレンを使わず、みんなで版を踏んで、身体全体で刷る体験をしました。

11月2日(土) 13時30分－17時30分
会場：瀬戸市文化センター文化交流館12会議室
対象：小学5年生以上／参加者：8人

学校派遣ワークショップ

木曽浩太

普段はやきものを作るために使用される粘土や原料を絵の具として用い、日本画の技法で独自のキャラクターを描きました。

10月24日(木) 13時35分–15時25分
会場：瀬戸市立萩山小学校図工室
対象：小学5・6年生／参加者：32人

シルクスクリーン体験

運営：スロメ

持参してもらったTシャツ等に、シルクスクリーンで展覧会のロゴや作品などのモチーフを刷るワークショップを行いました。

10月26日（土）10時－17時
会場：瀬戸市新世紀工芸館工房棟3階
対象：一般／参加者：125人

キュレーターと歩く

本展キュレーターが各会場を回りながら
展覧会の見どころについてお話しました。

10月27日(日) 13時30分–15時30分
11月4日(月・振休) 13時30分–15時30分
参加者：計34人

キュレータートーク in 愛知県図書館

本展キュレーターが展覧会の楽しみ方や作品鑑賞に役立つヒントについてお話しました。

10月18日(金) 18時30分–19時30分
会場：愛知県図書館1階エントランス
Yottcko（ヨッテコ）／参加者：47人

交流センター

休憩やおしゃべり、待ち合わせなどにも誰でも気軽に利用できる場所を、国際芸術祭「あいち２０２５」ラーニングチームが整備しました。

運営時間：10時30分－12時／13時－16時
会場：旧小川陶器店

ボランティア活動記録

作品や作家、会場となる地域と来場者を繋ぎ、その魅力や新しい気づきを伝えることを目的に活動しました。

参加ボランティア：31人

ボランティア活動記録

9月6日(金) 18時－20時30分
9月7日(土) 14時－16時30分
ボランティア説明会の実施。
「まちを観察するためのワークシート」の配布。

9月6日(金)－11月4日(月・振休)
ワークシートを用いた、街や作品の観察。

10月12日(土)－11月4日(月・振休)
「街と芸術祭をよくみるためのマップ」の作成と配布。

10月13日(日) 13時30分－16時
研修「鑑賞ディスカッション」の実施。
作品をみたこと、感じたこと、考えたことを伝え合い、経験や考えを自分の中に定着させるプログラム。
（企画：国際芸術祭「あいち2025」ラーニングチーム）

10月14日(月・祝) 10時30分－13時
研修「遠隔鑑賞会」の実施。
作品やその背景の状況を観察して、その内容を遠隔地にいる人に言葉だけで伝えることで、新しい見方や伝え方を発見するプログラム。
（企画：国際芸術祭「あいち2025」ラーニングチーム）

10月14日(月・祝) 16時30分－18時
キュレーターによる「作品解説会」の実施。

10月26日(土)
「ツアー大会議」の実施。

10月28日(月)－11月4日(月・振休)
「街と芸術祭をよくみるためのツアー」の実施。

ボランティアと深める

企画運営：アートプログラムユニット フジマツ

会期中、本展をサポートするボランティアが街や作品をリサーチし、マップやツアーを通して来場者と交流しました。

「街と芸術祭をよくみるためのマップ」の配布

「街と芸術祭をよくみるためのツアー」の実施

10月26日（土）
※先行実施
有機と無機になってみるツアー
模様で街を感じるツアー
参加者：6人

10月28日（月）
瀬戸に降り積もった歴史を感じるツアー
瀬戸川と古民家ツアー
緑と音を楽しむツアー
きたれ健脚!! 瀬戸の勾配を感じるツアー
参加者：9人

10月30日（水）
瀬戸路地を歩くツアー
とってもゆっくりゆっくり歩くツアー
足で歩いた気分になるツアー
注意しなければ見えてこない歴史ツアー
参加者：8人

10月31日（木）
街のみんなはアーティスト？ツアー
版画バーチャルの世界で瀬戸ツアー
参加者：5人

11月1日（金）
瀬戸のものたちの気持ちになってみるツアー
さりげない瀬戸愛の底に触れる
センスが良くて美しい瀬戸ツアー
かおにしようと思ってものを見るツアー
そこにふれるツアー
参加者：6人

11月2日（土）
タナちゃんの仮説ツアー
「知」を考えるツアー／ノスタルジックツアー
参加者：8人

11月3日（日）
新世紀のバンクの旅ツアー
焼物を楽しむツアー
瀬戸に降り積もった歴史を感じるツアー
かおにしようと思ってものを見るツアー
注意しなければ見えてこない歴史ツアー
参加者：7人

11月4日（月・振休）
無知くんのなかまさがしツアー
まちが重ねた「時」を感じるツアー
瀬戸の音？ツアー
せとふたツアー
参加者：16人

3つの異なるテーマを設定した、回遊型のブックイベントを開催しました。

来場者：のべ5791人

瀬戸 まちなか本の市

企画運営：本のさんぽみち実行委員会

せとまちブックマルシェ ～ZINE special!～

10月13日(日)、14日(月・祝) 11時－16時
会場：本・ひとしずく、古民家宿ますきち

There. (Artbooks)

10月13日(日)、14日(月・祝) 10時－17時
会場：古民家レンタルスペース梅村商店

せと末広町 本のさんぽみち

10月14日(月・祝) 10時－16時
会場：せと末広町商店街

末広町商店街
触れる底
Touch the Bottom
軽車両を除く
11 - 22
中央劇場
アートと文化の息づく商店街

坂道まぼろし夜市

企画運営：Barrack

瀬戸市立図書館の敷地内で、
一夜限定のライブとフード&ショップのイベントを行いました。

10月19日（土）16時－20時
会場：瀬戸市立図書館
来場者：2830人

井手健介

Etranger

小池喬

ライブイベント
18時 – 20時

井手健介
音楽家。これまでに『井手健介と母船』『エクスネ・ケディと騒がしい幽霊からのコンタクト』等の作品を発表。近年は映像作家としても活動し坂本慎太郎、カネコアヤノ、Bialystocks 等の MV を監督している。

Etranger
北九州在住のシンガーソングライター、アイカによるソロプロジェクト。ギターを片手に英語と日本語を歌う。雲のように漂い、波のように感情的な歌声は、日常の喜びや人生の悲哀を感じさせ、ここではないどこかへと聴く人をいざなう。Etranger は異邦人・旅人・エイリアンなどの意味がある。

小池喬
バンド〝シラオカ〟のボーカル、ギター。2014年、声とギターによるソロアルバム『宇宙のくしゃみ』を 7.e.p records よりリリース。また〝こいけぐらんじ〟名義で、イラストレーター、画家としても活動中。

フード&ショップ
16時 – 20時

deli
タロケイ
手相こべや
スペシャルティコーヒー蒼
MAEJAYA golden SAMOSA!
はらぺこ菓子店天秤堂
ほんだびれっじ
ゥさん食堂
タネリスタジオ
これでいいんだ村
Pastificio Sugino
Art Space & Cafe Barrack
庭禾
いたまど
anopan
インド料理 EMPO
オノモト商店
ユメテンゴク

サウンドアーティスト
ASUNAによる代表作
「100 Keyboards」を、
愛知県で初めて上演しました。

会場：瀬戸市文化センター文化交流館3階31会議室
参加者：122人

サウンドパフォーマンス

100 Keyboards

—Moire Resonance by Interference Frequency—

～干渉音の分布とモアレ共鳴～

11月3日（日・祝）

事前解説：16時－17時
公演：17時30分－18時30分
アフタートーク：19時－19時40分
ゲスト：藤井明子

ASUNA

石川県出身の電子音楽家で、語源から省みる事物の概念とその再考察を主題として作品を制作。音の物理現象に関する美術作品の制作やパフォーマンスと並行して、10代の頃から東京の実験音楽、即興、音響シーンに関わり、様々なアコースティック楽器やPCベースによる作曲から演奏までを行っている。

まちなか連携

会期中、瀬戸のまちなか周辺では
地域の施設や団体による様々な企画展やイベントが開催されました。

連携企画

地域の施設で本展のテーマや企画等と連携した内容の企画展が開催されました。

磁祖加藤民吉没後200年事業
瀬戸市制施行95周年記念
瀬戸市美術館特別企画展
「瀬戸染付――軌跡そして技と美――」
会期：10月5日(土)－11月24日(日)

瀬戸蔵ミュージアム企画展
「底・裏を愉しむ」
会期：10月12日(土)－11月4日(月・振休)

瀬戸市新世紀工芸館
「瀬戸国際セラミック&ガラスアート交流プログラムの軌跡――招聘作家寄贈作品展」
会期：10月12日(土)－11月4日(月・振休)

連携事業

地元商店街等でイベントが開催されました。

土街人トークイベント
「国際芸術祭「あいち」の歩き方
瀬戸に国際芸術祭がやってくる！」
日時：9月20日(金) 19時－20時30分

瀬戸陶芸協会
「花の器」展
会期：10月7日(月)－11月10日(日)

せと末広町商店街
「アートと文化が息づく商店街」
期間：10月12日(土)－11月4日(月・振休)

安戸シューティング ドローイング展
「steady light」
会期：10月12日(土)－11月4日(月・振休)

瀬戸蔵ミュージアム企画展「底・裏を愉しむ」展示風景

開催風景

テキスト・記録

エッセイ

「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」を振り返る

入澤聖明
［本展キュレーター、愛知県陶磁美術館学芸員］

本展は国際芸術祭「あいち」の地域展開事業として開催され、瀬戸市内の会場7ヶ所で国内外の若手作家10名を紹介した。

会期中はアーティストトークやキュレーターによるトークなどがあり、本展の概要をはじめ、各作家が普段どのようなことをテーマとしているのか、どのようなアプローチで今回の出品作に至ったかという点についてはお話しする機会があったが、本展のテーマと出品作との関係性については明確に語る機会が無かった。

そこで本展を改めて「底に触れる」という視点から、それぞれの実践を簡潔に書き留めておきたい。

まず「底に触れる」というテーマについてであるが、今回は瀬戸が舞台であったため、やきものを手がかりとした。たとえば茶碗をひっくり返した「底」は意識的に目を向ける機会は少ないが、実は重要な情報を秘めている。どのような土を使っているのか、どこの窯印が入っているのか、高台はどのように削られているのかなど、得られる情報は多岐にわたる。翻って茶碗の見込みの「底」はすぐに見えて触れられるが、深い壺となれば覗き込んで手を伸ばさなければ触れられない。このように、普段は目を向けない「底」を通してさまざまな情報に触れさせる、あるいは見えない「底」を覗き込んで触れさせようとする行為は、アーティストの創作活動に通じるのではないかと考え、設定したのである。

また瀬戸は、平安時代から消費地の求めに応じた陶磁製品を手がけ、国内外でも最大級の産地のひとつとなった。そのものづくりを支えたのは、木節粘土や蛙目粘土といった上質な土あるいはガラスの原料となる珪砂をはじめ、絵付の顔料や釉薬に使用される鬼板（酸化鉄）や呉須（コバルト）といった天然資源が産出する稀有な場所であったこと、そして伝播した技術や文化を積極的に吸収し、発展させた人々の存在が挙げられる。さらには素材や技術だけでなく、まちに目を向ければ、やきものの輸送のために鉄道が敷設されるなど、まちの構造すらも密接にやきものと関わっているのである。ゆえに瀬戸は「底」に触れようとすればどこまでも奥深く、魅力に溢れているのである。

このような特色を有する瀬戸で展示をするにあたり、キュレーターチームは作家とともに、展示会場をはじめ瀬戸のまちなかや陶磁製品の工場、窯元を訪ね歩くことで、できるだけ歴史的経緯や現状に触れられるように努めた。ただ、必ずしも作品で瀬戸や愛知での文脈に言及することや、本展のテーマを意識して制作することは依頼せず、あくまで各々の関心の範囲内で気になる点があれば深掘りをしていくというものであった。

以上の経緯を通してアウトプットされた各作家の実践は「底に触れる」という視点からどのように紐解けるのであろうか。大まかではあるが次の四つに分類してみる。

1　展示会場を起点として、場所の文脈を掬い取ることで「底に触れる」。
2　会場にとどまらず、瀬戸のまちなかや愛知の文化的・歴史的文脈に接点を持つことで「底に触れる」。
3　地域の人々との交流や関係性を通して「底に触れる」。
4　自身の制作を通して「底に触れる」。

1

展示会場のもつ背景も含めて作品化したのが植村宏木である。会場となった工芸家・藤井達吉ゆかりの無風庵では、藤井が手がけた七宝・陶芸や掛軸、絵具箱が植村ならではの

視点で展示構成されており、展示物として切り離されたモノではなく、モノが場所と紐づきながら藤井の視点を感じさせる見せ方となっていた。また、瀬戸の足元に広がる膨大な珪砂の存在を示唆するガラス片の山を出現させたほか、無風庵が位置する広場には、昭和期の陶磁産業の繁栄によって白濁した瀬戸川を象徴するための川の石や、その石を模した陶・ガラスが陶磁製品輸送用の木箱に収められたインスタレーションを展開し、この場を舞台とするからこその深みをともなった展示となっていた。

光岡幸一は会場となった旧小川陶器店で、廃棄される運命であった陶磁器に着目をした。産地ならではの大量生産によって生み出されたモノは、時代ごとの生活様式の変化にともなって行き場を失う。だが光岡が関わったことで、場所から解き放たれたモノは、モノと人との新たな関係性を構築する可能性を示していた。また、光岡の絵付けは陶磁器に慣れ親しんだ瀬戸の人々、あるいはやきものづくりに関わる人々から見れば多分に奔放で即興的なものに感じられたかもしれないが、その軽やかさが凝り固まってしまったものを解きほぐすかのように、前向きに作用していたのが印象的であった。

2

藤田クレアは自ら瀬戸のまちなかを歩き、さまざまなテクスチャーを型取りしてレコードに仕上げた。まちなかの凹凸が音に変換されたことで、これまで気にも留めなかった部分が場所の特性として意識に浮かび上がり、まちなかへと目を向けさせるきっかけとなっていた。また、窯元や工場から集めてきた廃棄物としての陶片に土をふりかけた作品は、焼き固められて二度と元に戻ることのないモノに、改めてどのような創造的可能性を見出せるのかという視座があり、産業が直面する流通させられないモノへの挑戦的な提示となっていた。

瀬戸市立図書館に設置された北川民次の陶壁画へのユニークなアプローチを見せたのは木曽浩太であった。木曽は陶壁画に描かれた主題から、独自の世界観で新たなストーリーを構築することで、固定化されがちな鑑賞の視点のなかに、ネガ・ポジ両面の解釈の自由さを提示していた。また瀬戸の土を顔料として使用した絵づくりは、土が本来もつ色彩の豊かさに気付かされるきっかけとなった。

一方、田口薫は自身が思春期を過ごした瀬戸をもう一度歩きながら、当時の心情を投影するかたちで、まちなかや瀬戸川の風景を木版画の連作として仕上げた。とりわけ瀬戸川の流れに自身の心の動きを重ね合わせた俳句の表現は、ナラティブで確かな共感を生み出していた。また偶然ではあるが、木曽と同じくモチーフとして民次の陶壁画を別の視点から描いたことはとても興味深く、民次が瀬戸の人々の意識に馴染んでいる様子が窺えた。

井村一登は自身がテーマとする鏡を軸として愛知県内各地をリサーチし、歴史的・文化的・産業的接点を探り出そうとした。展示においては、県内の鏡にまつわる個別の事象を、連続性をもって提示し、新たな一面に光を当てることとなった。また会場内ではリサーチや制作の工程を記録した映像が、鏡を通して壁面に投影されており、その光学的な役割も含めて一つの作品として確実にまとめ上げていた。

3

今回、滞在制作というかたちで地元のコミュニティと関わりながら作品を仕上げていっ

たのがインドネシアのユダ・クスマ・プテラである。そもそもは2023年のアッセンブリッジ・ナゴヤにおける「港まちAIRエクスチェンジ2023」での滞在制作をきっかけとして、地元の人々との交流にもとづく制作の可能性を見出し、本展への参加を依頼した。今回は瀬戸の窯元や陶芸家をはじめ、商店街の人々のポートレートシリーズを制作したほか、瀬戸に住む人々に陶片に言葉をしたためてもらい、それらを再構成して詩のような一文をつくることで、瀬戸を独自の視点で描き出そうとした。

他方で、自身の活動拠点を上海に移し、現地の人との交流を通して気づいた東アジアの文化的な差異を作品として昇華したのが後藤あこである。後藤はその差異を前提として共存している人々の関係性を顕在化させようと試みた。また轆轤（ろくろ）を思わせる回転盤が仕込まれた展示台の上では、顔の無い陶の人物像と鏡がくるくると回転しており、時折鑑賞者が鏡に映り込むことで、鑑賞者自身の意識が自然と人物像にオーバーラップするような展示が成立していた。

4

波多腰彩花は低火度焼成の柔らかな質感、やきものの性質に着目し、その内面構造だけでなく、展示空間を薄布で覆って鑑賞者ごと包み込むことで、新たな鑑賞体験を構築しようと試みていた。また波多腰の生み出す独特な形状の立体造形は、工芸的な触覚を誘いながらも、作者自身あるいは鑑賞者の経験や記憶を呼び起こすような展開も感じられた。

津野青嵐は臥床生活でともに食卓を囲むことが難しくなった祖母の介護経験を出発点として、もう一度家族で食卓を囲むことを実現させるためにテーブルクロスの衣服を作り上げた。この衣服は家族を招き入れることで人と人をつなぐものとして機能しており、普段は見えない家族間の温かな関係性を可視化していた。

以上、瀬戸における各作家たちの試みを「底に触れる」という視点で分類しつつ振り返ってみた。彼らの作品はそれぞれのテーマを主軸としながら、場所や人との関係構築を試みたり、あるいは展示を通してさまざまな気づきをもたらすものであったといえる。なかでも陶磁製品や陶片、ガラスを使用したり、原料や産業への独自の言及が見られたことは、瀬戸を舞台にしたからこその特徴が出ており、この地で開催した意義があったと言えよう。

一方で瀬戸は、陶磁産業が最盛期と比較して生産量が減少したことにともない、かつての窯業関係の建物は潰されて空き地となり、そこには新興住宅やマンションが建てられ、まちの景色が生まれ変わっている現状がある。その新陳代謝は決して悪いことではないが、見方を変えればやきもののまちの特色が徐々に失われていくのと同時に、全国どこにでもありふれた風景へと置き換わるテクスチャーの均質化が起こっているのである。つまりやきもののまちとしての記憶は、底の方へと徐々に埋もれてゆき、意識的に目を向けねば見えなくなってきている。

このような現状に対して本展を通した彼らの試みは、まさしく「底に触れる」きっかけを与えてくれるものであり、さまざまな示唆に満ちたものであったといえよう。

レビュー

表現の底を抜き関係性を作ること
――「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」を見て

天野一夫
［美術評論家、豊田市美術館学芸員］

「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」が尾張瀬戸駅周辺といういわば瀬戸の街中で開かれた。オリエンテーリングのように作品を探しつつわれわれは商店街へ、そして知らぬ間に丘の上に、さらには駅裏の古民家へと誘われていく。いずれの芸術祭でもその場の自然を、街を体感し、その中でいかに場とリンクした表現が成立しているかを味わうものだ。それが瀬戸ということになれば時に昭和のままの複雑な街路をたどり、昔からの人の深い匂いを体感することとなる。そのことを何度もこの地を訪れている私などにもあらためて経験させる展観であった。

来年度には本格的に国際芸術祭が予定されている瀬戸での、前哨戦とも言うべき展観である。ちょうど日本各地で同時に芸術祭が開催されていて、中部地方でも南アルプス、奥飛騨、さらには多治見・土岐・瑞浪でも「土から生える」展が開催されていた。そちらでは窯場、釉薬工場などまさに陶業の現場も舞台となっていたのだが、さらに歴史の古い窯業地・瀬戸での本展では、陶芸の現場こそなかったものの（元陶器店はあったが）、瀬戸に生まれ、在住、在学（瀬戸市新世紀工芸館他）、滞在していた作家など、土地と何らかの結び付きを持つ作家［木曽浩太、田口薫、植村宏木ら］から、今回初めて外から参加したと思われる作家［藤田クレア、井村一登、（豊田市出身だが）光岡幸一ら］までを集め、それぞれにあらためて瀬戸市という場所をリサーチし、新たな関係性と解釈を発生させていたように思われる。

しかしそのほとんどの作品は瀬戸の陶との関わりを示していたことは強く印象に残った。確かに今回のキュレーターは愛知県陶磁美術館で「ホモ・ファーベルの断片」展等で現代陶芸を現代表現として拡張的に展観して注目され、来年の国際芸術祭「あいち２０２５」でもキュレーションを展開する入澤聖明を中心に国際芸術祭の副田一穂、芹澤なみきである。それゆえに現代陶芸、あるいはその周辺で活動してきた作家が多いのは分かる。しかし、陶の表現でない絵画表現の木曽浩太にしても瀬戸の土で描いたというし、様々な関係性を探る作品を展開するユダ・クスマ・プテラも瀬戸に滞在し、ここでは陶片を介在にして文字を記すワークショップをしてもいた。それだけ瀬戸の窯業磁場が強いのであろうか？ またそれに加えて、瀬戸市、豊田市猿投を中心とした陶土層には、石英を主体とする珪砂が含まれていて、日本有数のガラスの原材料地で、瀬戸市新世紀工芸館でも工房があるが、ここでも卒業生の植村の他、ガラス素材としては井村も組み込まれていた。

むしろ近年、瀬戸では陶芸関係の工場等が閉じて、その後に若い美術家たちがアトリエを探して移住してきている。TANERI などのような単なる共同アトリエにとどまらず、ギャラリーや他地域との発信の場ともなっている場もある。そこでは絵画、インスタレーション等多様な表現を展開しているが、今回はそのような作家たちは入っていない。しかし、その分、この陶を中心とした歴史ある造形環境の中での市内外の俊英による展示という印象が強かった。

今回の作家・作品を瞥見したい。

むろん、同じ場所だとしても作家によって様々な関わり合いがあり、かつてのような強固な共同体を前提にしたものばかりではなく、個人としての多様な記憶が付随する。田口薫の作品はほとんどが風景である。それも奥行きのあるいくつかの場の中に、立っている作者と思われる人の影が落ちている。田口も今は生地瀬戸を離れていて、今回瀬戸を再訪してのある距離感の下での表現らしい。か

表現の底を抜き関係性を作ること
――「底に触れる　現代美術・in瀬戸」を見て

天野一夫

つて見た生地の光景と現イメージばかりか他の場も嵌入（かんにゅう）し、その時間層を蝕知するように手前に指先が挿入してくる。その揺動するイメージは、描きながら彫る（掘る）というペインティングと木版画との併合という独特の引き裂かれた手法とよく見合っていた。

波多腰彩花は陶の造形物に伴う中空構造を見出し、それを起点に古い店先の棚などに作品をならべ、さらにその展示空間を薄布で囲うことで内外を隔てながら、その中に入っての鑑賞経験を仕組んでいた。半ば陶の中に入っての経験という、いわば二重の膜構造にしようとすることで、作家の発見した造形観をそのまま具体的な展示に展開することは、直喩的な表現に近い。実際にはその展示は作品の繊細な表情に沿う雰囲気、気分の演出にはなっても、観者の意識の覚醒にはあまり寄与したようには思われない。作品の良質さゆえに残念な感が残った。

津野青嵐はファッションデザイン、そして看護師としての経験を活かしながら、寝たきりの自らの祖母のためにテーブルクロスと一体となった衣服を作り、個から外部に延長された食卓を囲う人とのコミュニケーションの場を物質化している。これも直喩的な表現と言えるが、この奇態な服とは個の輪郭をわれわれに問いながらも、他方で造形としての範囲も物質観も逃れようもなくあるという矛盾、アポリアを抱え込むことになる。

後藤あこはこれまで陶を主体にしながらも、インスタレーション的な表現を展開してきている。近年、上海に移住していて今回は現地で出会った多様な民族、出自の人々と話し、様々な異文化接触の感覚を基盤としたようだ。轆轤（ろくろ）の回転の向きも異なるという文化的な差異をベースにこれまでと同様のハリボテの人体をターンテーブル上に乗せ、文字通り右に左に回転させてしまう。表現したい内容をこれほど直截（ちょくせつ）に表現せず、これまで作家は、より多義的な読みを前提に寡黙に仮構してきたと思う。むしろ陶という重く身体的なフェティッシュさをたたえた時に等身大に近い人体像を作りながらも、細部まで作らず曖昧にして茫洋としたハリボテの造形として脱臼させるズレがあったはずである。

ここまでで若干指摘したのは単なる展示方法ではなく、直喩的な表現の回路・手法とした問題である。そのリテラルさは彼（女）たちの作品だけではない。言うまでもなく個的作品だけでなく、展示も含めてが作品なのだが、〈文字通りの表現〉を避けながらいかに作品と他者とを関係づけるかを考えないと表現は内向きに閉じていってしまいかねない。

またその後藤、津野とともに瀬戸市新世紀工芸館を会場にしていたのは井村一登である。この施設ではすでにふれたように、陶だけでなくガラス工房もあり、多様な作家が日々制作している。井村はガラス工芸作家というよりは、制作したガラスの塊を割り、磨き、黒曜石のような天然岩石とともに、輝く岩石のように見せてもきた。一階にはその魅惑的な透明にして不可思議に輝く作品を展示しているが、その原器的な表情とともに、今回は古代の三角縁神獣鏡を型に取り、ガラス化し、そこに光を当てることで、古代のアウラを今日的に再確認しようとしていた。ガラスと人との出会いの原風景への全く異なる道筋だが、鏡を使った展示はイマジネーションが拡がらず、むしろ前者のガラスの塊の魅惑に圧倒された。

その中で、藤田クレアは瀬戸の町の多様な物質から型を採取して、そのかたどった素焼きを展示するだけでなく、それを音に変換するなど様々にずらしていた点が興味深かった。それでもオブジェ性は消えないが、作家は作っては壊す行為に執着しているとかつて

語っていたが、ここでも廃品の再構成というだけでない、一つの物から多様なものに連鎖・変化していく動的な実態が感じられた。

植村宏木は瀬戸を見晴るかす小高い丘の上にある無風庵とその前庭を場としていた。ここはかつて小原（現・豊田市）にあった藤井達吉とその弟子たちが工房として使用していた民家を移築したものと聞く。小原では本来は陶芸というよりも紙工芸の工房であったろうが、瀬戸にも滞在していた達吉はこの地にもインパクトを残している。そのために植村は達吉の実作と道具なども含め、自らのガラス工芸の原材料である珪砂の山を畳間に、またガラスの原型のような塊や陶、さらには石などがリンゴ箱に積まれ、古代からの原イメージから近代の記憶までをつなぎ喚起させようとしていた。

さらに光岡幸一はあらかじめリサーチを行いながらサイトスペシフィックなその場と強く結んだ介入の仕方をこれまでもしてきた作家である。光岡は今回、廃業した陶器店にあったもはや誰も手に取らない廃品と化した陶器を生まれ変わらせるように、作家があらためて文字などを上絵付したものを店頭に出してフリーで人々に持っていってもらったという（筆者が行った時にはほとんど商品は残っていなかったが）。そのための包み紙、看板等を光岡は仕立てて再びの陶器店を明るいゴーストのように演じていたようなのだ。ナンチャッテの陶芸家が、ナンチャッテの陶器店を数日限り行うこと。一旦、ホコリを被った陶器たちを賦活（ふかつ）し、開放したこの行為に本展の最も印象深い象徴的なイメージを見た思いがした。

藤田クレア｜FUJITA Claire

《聴こえる風景 ~Tones of the City~》
2024年
ミクストメディア
The Unspoken Chorus -ver. Seto city-
2024
mixed media

《変化の残響 ~Echoes of Transition~》
2024年
ミクストメディア
Echoes of Transition
2024
mixed media

《Invisible soundscape ~version1: (1+√5)/2+x~》
2020年
ミクストメディア
Invisible soundscape ~version 1: (1+√5)/2+x~
2020
mixed media

《街の型取り》
2024年
シングルチャンネルヴィデオ（2分46秒）
Traces of the City
2024
single channel video (2 min. 46 sec.)

植村宏木｜UEMURA Hiroki

《有無のはかり》
2024年
木箱・石（瀬戸川）・陶・ガラス・ミクストメディア
Infer the Existence
2024
wooden box, stone (Seto river), ceramic,
glass and mixed media, type-4 ceramic grenade

《うぶすなのこえ》
2024年
ガラス
Birthplace
2024
glass

《漂泊の旅》
2024年
陶・七宝・ガラス・瀬戸呉須（岩呉須）・方位磁針・
松の葉（権現岬）・土（豊田市小原）・ミクストメディア
Eyes on the Destinations
2024
ceramic, enamel, glass, Seto cobalt (rock cobalt),
compass, pine needle (Gongenmisaki),
soil (Toyota, Obara) and mixed media

藤井達吉｜FUJII Tatsukichi

《上州白根頂上》
1919–35年
七宝、銅
愛知県美術館・藤井達吉コレクション
Top of the Mt. Joshu-Shirane
1919–35
enamel on copper
Aichi Prefectural Museum of Art
(Fujii Tatsukichi Collection)

《海》
1910年
七宝、銅
愛知県美術館・藤井達吉コレクション
Sea
1910
enamel on copper
Aichi Prefectural Museum of Art
(Fujii Tatsukichi Collection)

《赤絵松原図花器》
1935年頃
陶器
瀬戸市美術館
Vase with Pine Grove Design in Red Overglaze Painting
ca. 1935
ceramic
Seto City Art Museum

《櫛目薊文大皿》
制作年不詳
陶器
瀬戸市美術館
Large Dish with Comb Pattern and Thistle Design
n.d.
ceramic
Seto City Art Museum

《藤井達吉旧蔵絵具箱》
制作年不詳
磁器・岩絵具・貝・新聞紙・木箱
瀬戸市美術館
Paint Box of Fujii Tatsukichi
ceramic, pigments, shell, newspaper, woodenbox
Seto City Art Museum

《漆描薬袋図》
制作年不詳
紙本著色
瀬戸市美術館
展示期間：10月12日–10月16日
Medicine Pouch in Lacquer
n.d.
color on paper
Seto City Art Museum
exhibition period: October 12 to October 16

《青い岩》
制作年不詳
紙本著色
瀬戸市美術館
展示期間：10月12日
Blue Rock
n.d.
color on paper
Seto City Art Museum
exhibition period: October 12

《水墨秋雨風景図》
制作年不詳
紙本墨画
瀬戸市美術館
展示期間：10月16日–10月26日
Landscape with Autumn Rain
n.d.
ink on paper
Seto City Art Museum
exhibition period: October 16 to October 26

《水墨きのこ図画賛》
制作年不詳
紙本墨画
瀬戸市美術館
展示期間：10月26日–11月4日
Mushrooms
n.d.
ink on paper
Seto City Art Museum
exhibition period: October 26 to November 4

《緑岩彩 雨後の山》
制作年不詳
紙本著色
瀬戸市美術館
展示期間：10月27日
Mountains after Rain
n.d.
color on paper
Seto City Art Museum
exhibition period: October 27

ユダ・クスマ・プテラ｜Yudha Kusuma PUTERA

《過去、現在、未来がひとつに》
2017年、2019年、2023年、2024年
デジタルプリント、紙
Past Present and Future Comes Together
2017, 2019, 2023, 2024
digital print on paper, studio installation, fabric

制作協力：
喫茶 NISSIN（浅井佑真、浅井梨歌、浅井美杜）／作助窯（加藤圭史、加藤裕子、井上匠、チロル）／10 代のフリースペース・パルス＊（小池田梨名、渡邊亮太、横道凜乙、渡邊彩峯、石川眞巳）／名古屋市立西築地小学校 トワイライトスクール＊（伊東奈結子）／名古屋市立西築地小学校 トワイライトスクール＊（蜷川睦規）／ばぁば工房＊（増本恵、近藤千鶴子、森茂子、石原俊子）／丸三本店＊（佐藤めぐみ、山川直樹）／港まち手芸部＊（宮田明日鹿、神村康代、掛布美津子、外舘陽子）／足立博貴、足立依子、足立美月、足立大和＊／エリオット・ヘイグ、澤田奈々＊／酒井智也、酒井秋乃、酒井颯楽／関谷四郎、関谷千鶴子＊／長谷川太希、長谷川有美、長谷川翔大＊／服部浩之、西田雅希、服部迪誉＊
＊印の作品は、アッセンブリッジ・ナゴヤ「港まち AIR エクスチェンジ 2023」の一環で撮影

《鳥とネット》
2024年
デジタルプリント、紙・ネット・ドローイング
Bird and Net
2024
digital print on paper, net and drawing

《瀬戸の詩的断片》
2024年
テキスト、陶片・デジタルプリント、紙
テーブル・畳・シングルチャンネルヴィデオ（3分56秒）
Poetry Fragment from the City of Seto
2024
text on ceramics, digital print on sticker,
table, tatami and single channel video (3 min. 56 sec.)

波多腰彩花｜HATAKOSHI Ayaka

《Skin of a Calm Day》
2024年
陶・布
Skin of a Calm Day
2024
ceramic, textile

後藤あこ｜GOTO Ako

《細い目》
2024年
リサイクルクレイ、鏡、電動モーター、木材
Small eyes
2024
recycled clay, mirror, electric motor, wood

井村一登｜IMURA Kazuto

《Magic mirror》
2024年
珪砂・塗料・シングルチャンネルヴィデオ（6分30秒）
Magic mirror
2024
silica sand, paint, single channel video (6 min. 30 sec.)

《mirror in the rough 784g》
2022年
ガラス・アルミ
mirror in the rough 784g
2022
glass, aluminum

《mirror in the rough 12997g》
2022年
ガラス・アルミ
mirror in the rough 12997g
2022
glass, aluminum

《mirror in the rough 853g》
2024年
ガラス・アルミ
mirror in the rough 853g
2024
glass, aluminum

《mirror in the rough 9729g》
2022年
ガラス・アルミ
mirror in the rough 9729g
2022
glass, aluminum

《mirror in the rough 1888g》
2024年
ガラス・アルミ
mirror in the rough 1888g
2024
glass, aluminum

《mirror in the rough 1800g》
2024年
ガラス・アルミ
mirror in the rough 1800g
2024
glass, aluminum

津野青嵐｜TSUNO Seiran

《The Wishing Table》
2024年
テキスタイル・シングルチャンネルヴィデオ（6分37秒）
The Wishing Table
2024
textile, single channel video (6 min. 37 sec.)

《Trace the pottery》
2024年
3Dペン（PLA）・葉
Trace the pottery
2024
3D pencil (PLA), leaf

木曽浩太｜KISO Kota

《毎日遊んでられる状態》
2024年
瀬戸の土・墨、紙
A State Where We Can Play Every Day
2024
clay of Seto, Japanese ink on paper

《愛知者たち》
2024年
瀬戸の土・墨、紙
People Who Love Knowledge
2024
clay of Seto, Japanese ink on paper

《多様性の時代》
2024年
瀬戸の土・墨、紙
The Age of Diversity
2024
clay of Seto, Japanese ink on paper

《人柱》
2024年
瀬戸の土・墨、紙
Human Sacrifice
2024
clay of Seto, Japanese ink on paper

《マトリックスマデアトスコシ》
2024年
瀬戸の土・墨、紙
Just a Little Longer until the Matrix
2024
clay of Seto, Japanese ink on paper

《あいつも来てればなあって》
2024年
瀬戸の土・墨、紙
I Wish He Was Here
2024
clay of Seto, Japanese ink on paper

《むちキャン〜ネットで調べまくって
準備万端なのでちょっと初キャンプ行ってくる〜》
2024年
シングルチャンネルヴィデオ（28分36秒）
Ignorant Camp: After Researching a Lot
on the Internet and Getting Everything Ready,
I Set off on My First Camping Trip
2024
single channel video (28 min. 36 sec.)

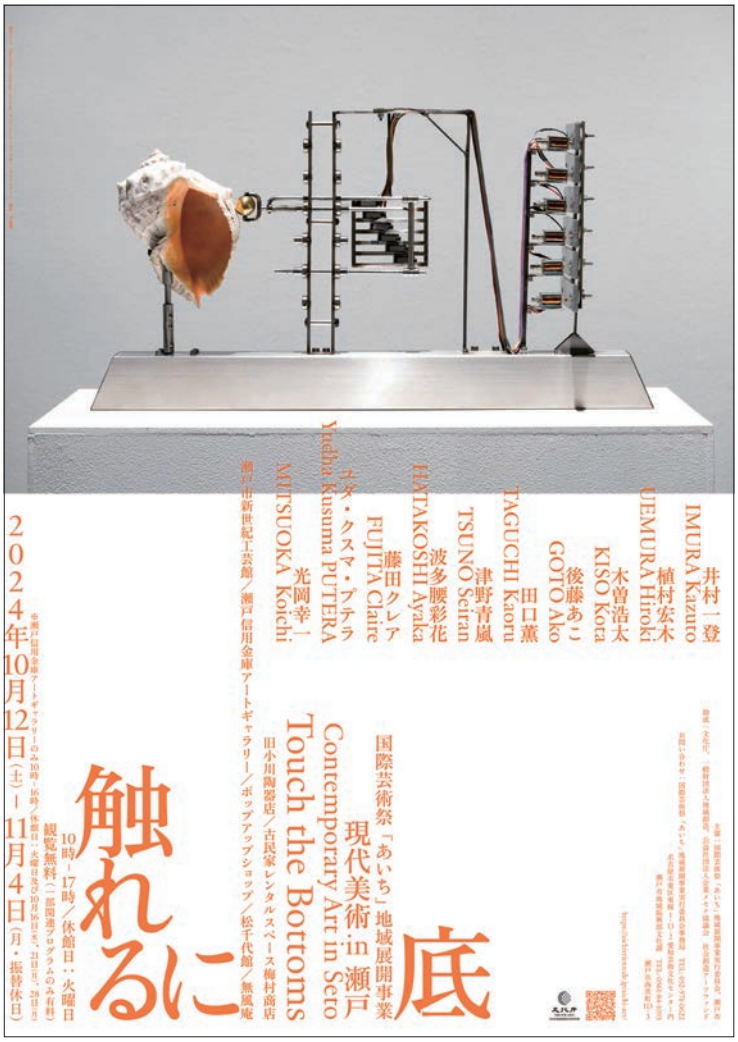
《むちキャン番外編〜水辺で遊ぶ無知たち〜》
2024年
シングルチャンネルヴィデオ（3分40秒）
Ignorant Camp (Special episode) :
The Ignorants Playing by the Water
2024
single channel video (3 min. 40 sec.)

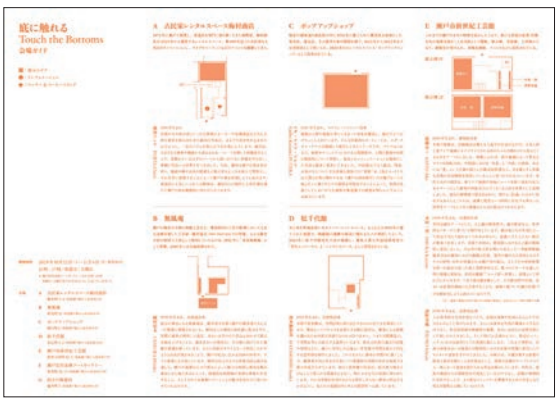
田口薫｜TAGUCHI Kaoru

《光の跡、遡行する影》
2024年
アクリル、パネル／水性木版、和紙
Trace of Light, Retroactive Shadow
2024
acrylic on panel, woodblock print on Japanese paper

光岡幸一｜MITSUOKA Koichi

《あとはどうぞご自由に。》
2024年
売れ残った食器・包装紙・看板
The rest is up to you.
2024
unsold dishes, wrapping paper and signage





上：開催ポスター（A3）
中：開催チラシ（A3二つ折り4頁）
下：会場ガイド（A3二つ折り4頁）

広報印刷物

来場者数

総来場者数		37,223人
うち	展覧会	27,797人
	アーティストトーク	369人
	アーティストによるワークショップ	17人
	学校派遣ワークショップ	32人
	シルクスクリーン体験	125人
	キュレーターと歩く	34人
	キュレータートーク in 愛知県図書館	47人
	瀬戸　まちなか本の市	5,791人
	坂道まぼろし夜市	2,830人
	サウンドパフォーマンス	122人
	ボランティアスタッフによる作品ガイドツアー	59人
ボランティアスタッフ		39人

広報記録

記者発表

2024年5月30日　やきもののまち、瀬戸で現代美術展を開催！ 国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」
2024年7月19日　国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」ボランティアを募集します
2024年8月20日　国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」プログラムの詳細が決定しました！
2024年9月2日　国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」サウンドパフォーマンス「100 Keyboards – Moire Resonance by Interference Frequency –」のチケットを発売します！
2024年9月6日　国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」「瀬戸 まちなか本の市」の詳細が決定しました！
2024年10月2日　国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」「坂道まぼろし夜市」の詳細が決定しました！

記者内覧

2024年10月11日

新聞

2024年6月21日　中日新聞｜県内版
国際芸術祭あいち盛り上げで美術展／瀬戸で今秋
2024 年9月15日　中日新聞｜県内版
国際芸術祭 せともの祭でPR
2024 年10月13日　中日新聞｜県内版
見えない可能性／現代美術で表現／瀬戸で作品展
2024年10月17日　中日新聞電子版
紙を通して交流、自主出版の魅力／瀬戸でマルシェ、雑誌など販売
2024年10月27日　朝日新聞｜愛知面
瀬戸市内7カ所／作家10人が出品／国際芸術祭プレイベント
2024年10月28日　中日新聞｜市民版
瀬戸の陶土使い日本画描いたよ
2024年10月31日　読売新聞｜地域面
瀬戸のアート 若手が発信
2024年11月1日　中日新聞（なごや東版）
現代美術彩る瀬戸 散策を

フリーペーパー

2024年9月27日発行：アサヒセト10月号
2024年10月10日発行：Potos! 尾張旭・瀬戸・守山版　464号
2024年12月25日発行：インテリジェンス Vol.7

テレビ

2024年9月14日　グリーンシティケーブルテレビ
『モリアワセ特別編せともの祭生中継 2024』
2024年10月30日　グリーンシティケーブルテレビ
『そらまめ通信』

Web

2024年6月2日　OutermostNAGOYA
愛知県瀬戸市で国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」を2024年10月12日–11月4日に開催
2024年8月24日　LIVERARY
瀬戸市で開催される、国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」のプログラムが発表。現代美術展に加えブックマーケットやサウンドパフォーマンスも。
2024年8月26日　なびぽ
「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」開催
2024年9月3日　OutermostNAGOYA
国際芸術祭「あいち2025」プレ事業　サウンドパフォーマンス「100 Keyboards – Moire Resonance by Interference Frequency –」を愛知・瀬戸市文化センター 文化交流館で2024年11月3日に上演
2024年9月4日　LIVERARY
大量の小型キーボードを使ったインスタレーション作品を披露。国内外で活躍する音楽家・ASUNAによる公演が、国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」にて開催。
2024年9月6日　OutermostNAGOYA
「瀬戸 まちなか本の市」愛知県瀬戸市で2024年10月13、14日に開催
2024年9月18日　LIVERARY
国際芸術祭「あいち」地域展開事業「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」にて、「瀬戸 まちなか本の市」開催。出店者も募集中！
2024年10月2日　OutermostNAGOYA
「坂道まぼろし夜市」愛知県瀬戸市で2024年10月19日に開催
2024年10月7日　LIVERARY
「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」関連プログラムとして、瀬戸市立図書館を会場とした音楽＆マーケットイベント「坂道まぼろし夜市」が開催。井出健介、Etranger、小池喬ら出演。
2024年10月13日　LIVERARY
瀬戸市のまちなかを会場とした「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」。全10作家にインタビューを敢行。街の魅力に触れる、編集部厳選おすすめスポットも。
2024年10月15日　ウェブ版「美術手帖」
国際芸術祭「あいち2025」の前に。「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」が開催中
2024年10月16日　Aichi Now
やきもののまち、瀬戸で秋を感じる現代アート
2024年10月17日　ウェブ版「美術手帖」
国際芸術祭「あいち」地域展開事業　底に触れる　現代美術 in 瀬戸
2024年10月26日　Sound-Art. Tech
「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」にて藤田クレアの作品が展示
2024年11月29日　電波新聞
サウンドパフォーマンス「100 Keyboards」愛知県と瀬戸市が開催

市広報

2024年7月26日から配布：広報せと8月号
2024年9月25日から配布：広報せと10月号
2024年10月25日から配布：広報せと11月号
2024年10月15日–10月31日：グリーンシティケーブルテレビ『せとまちテレビ』
2024年10月2日、16日、23日、30日：ラジオサンキュー『せとまちラジオ』
2024年10月23日：FM AICHI『MORNINGBREEZE』
2024年10月24日：天草ケーブルネットワーク『みつばちラジオ』
2024年10月2日：瀬戸市webページ「文化」
2024年10月28日：瀬戸市webページ『注目情報』
瀬戸市公式Instagram：瀬戸市PR【公式】、瀬戸市まるっとミュージアム・観光協会
瀬戸市役所1階｜デジタルサイネージ放映

県広報

2024年9月1日　AAC Journal『navigator's COLUMN』
2024年10月17日　東海ラジオ『DRIVER'S REPORT』
2024年10月24日　東海テレビ『村上佳菜子の週刊愛ちっち』

その他

名古屋鉄道｜各駅ポスター掲示、車内ポスター掲示
愛知環状鉄道｜各駅ポスター掲示、車内ポスター掲示
愛知高速鉄道｜各駅ポスター掲示、車内ポスター掲示

地下鉄栄駅｜デジタルサイネージ放映
メ～テレセントラルビジョン｜デジタルサイネージ放映
メ～テレヒサヤセントラルビジョン｜デジタルサイネージ放映
東部丘陵線（リニモ）藤が丘駅｜デジタルサイネージ放映

広報せと 10月号｜パンフレット全戸配付
ファミリーマート各店舗（豊明市・日進市・みよし市・長久手市・東郷町・春日井市・瀬戸市・豊田市・名古屋市（北区・守山区）・尾張旭市）｜パンフレット設置

国際芸術祭「あいち」地域展開事業 Webサイト
https://aichitriennale.jp/aichi-art/
国際芸術祭「あいち」地域展開事業 SNS
X・Instagram・Facebook

HOTEL ROUTE INN
栄交通
消火栓

国際芸術祭「あいち」地域展開事業
底に触れる
現代美術 in 瀬戸
Touch the Bottoms
Contemporary Art in Seto

会期
2024年10月12日（土）– 11月4日（月・振替休日）

会場
旧小川陶器店、古民家レンタルスペース梅村商店
瀬戸市新世紀工芸館、瀬戸信用金庫アートギャラリー
ポップアップショップ、松千代館、無風庵

主催
国際芸術祭「あいち」地域展開事業実行委員会、瀬戸市

助成
令和6年度 文化庁文化芸術創造拠点形成事業
一般財団法人地域創造
公益社団法人企業メセナ協議会 社会創造アーツファンド

認定
あいち県民の日連携事業

展覧会

キュレーター
入澤聖明
（愛知県県民文化局文化部文化芸術課国際芸術祭推進室主任／
愛知県陶磁美術館学芸員）
芹澤なみき
（愛知県県民文化局文化部文化芸術課国際芸術祭推進室技師／
愛知県美術館学芸員）
副田一穂
（愛知県県民文化局文化部文化芸術課国際芸術祭推進室主査／
愛知県美術館主任学芸員）

会場運営
株式会社コノハ美術

ボランティアと深める企画運営
アートプログラムユニット フジマツ

広報印刷物デザイン
加納大輔、和田悠馬

関連プログラム

シルクスクリーン体験運営：スロメ
瀬戸 まちなか本の市企画運営：本のさんぽみち実行委員会
坂道まぼろし夜市企画運営：Barrack（古畑大気＋近藤佳那子）

国際芸術祭「あいち」地域展開事業実行委員会事務局
〒461–8525 名古屋市東区
東桜一丁目13–2（愛知芸術文化センター内）
TEL 052-971-0622
瀬戸市地域振興部文化課
〒489–0884 瀬戸市西茨町113–3
TEL 0561-84-1093

カタログ

編集
入澤聖明、芹澤なみき、副田一穂

撮影
城戸保

ただし、31・33（上、下）・34頁（下）は井村一登
32頁（上）は助田喜久、32頁（下）は宮川悠之介、34頁（上）は助田喜久
44頁（下）は田口薫、48・55・56頁（上、下）・57・58頁は事務局
59頁は国際芸術祭「あいち 2025」ラーニングチーム
60・61頁は松村淳子
64・65（右上、右下）・70頁（上、中央）はカワイコージ
67頁は岩井理による撮影

デザイン
加納大輔、和田悠馬

発行
国際芸術祭「あいち」地域展開事業実行委員会、瀬戸市

©2025

国際芸術祭「あいち」地域展開事業 実行委員会

委員長
朝日真（愛知県県民文化局文化部部長）

副委員長
平瀬礼太（愛知県美術館館長）

委員
伊藤弘憲（公益財団法人愛知県文化振興事業団常務理事）
佐藤一信（愛知県陶磁美術館館長）
中島宗仁（瀬戸市地域振興部部長）
藤井邦彦（公益財団法人瀬戸市文化振興財団常務理事）
鈴木政成（瀬戸市まるっとミュージアム・観光協会会長）
高田佳伸（瀬戸商工会議所専務理事）
水野忠治（中央通商店街振興組合代表理事）
河本篤（銀座通り商店街振興組合代表理事）
大橋徹太郎（末広町商店街振興組合代表理事）

監事
柘植里恵（公認会計士）
大野明彦（文化行政経験者）